
エウロパの旅人ー日本再生篇

山田 潤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エウロパの旅人―日本再生篇

【Nコード】

N0921Y

【作者名】

山田 潤

【あらすじ】

地軸のずれにより舞い上がった粉塵は収まりつつあったものの、日本は南極の座標に位置したままだった。東北のカリスマ―伊都淵の指示で丈は生まれ育った農園へと向かう。待ち受ける異形の脅威、氷のドームの建造、生存者の搜索と多くの使命を果たすには気弱過ぎる青年である丈を、農園の仲間達が、石田真由美が支える。次の衝撃波は襲ってくるのか？そして日本の未来は――

檻の中の惨劇（前書き）

エウロパの旅人——日本再生篇の連載を開始します。前作にはたくさん
さんのアクセスをいただき、大変ありがとうございました。本作も
お読みいただけます幸いです。

檻の中の惨劇

「気をつけてな」「誠に宜しく」《イッテラッシャイ》と、口々にプラス意識にかけられた言葉に送られて僕は杜都市を後にした。全長6・3mのホバークラフトに積み込まれた荷物は液化ガスのタンクであったり農園に届ける食料であったりで、それらは7人乗りの客室を取り去った2／3を占めていた。

伊都淵さんと依子さんが作ったというホバーは、僅かな斜面や路面の凹凸さえもが障害となるエアクッションタイプとは異なり、地軸のずれにより安定した磁気を浮力と推進力に利用している。これなら非力な女性でも軽々と引けることだろう。しかし……

往路で救出を約束した石田さん一家をピックアップする予定のプランは、犬達に引かせた橇を僕が颯爽と先導するという構想であり、僕が犬の代わりをするのは計算に入っていない。井ノ口市を発った時同様、気の利いた台詞で杜都市の人々に別れを告げることが出来なかったのは、それが理由でもあった。

——忘れていた。氷の檻に閉じ込めたアイスギャングどもが居たではないか。奴等が改心していれば助け出してホバーを引かせればいい。妙案が浮かんで上機嫌となった僕は、鼻歌混じりにホバー先端に備えられた発電表示計を振り返る。船体全面に張り巡らされたソーラーモジュールの総発電量は0・4kw、磁性発生器を作動させるのがやっとといったところだった。明るくなつたとは言え、日射のないこの状況ではやむを得ないのだろう。

僕の脳味噌はイトペディア（伊都淵さんに詰め込まれた脳内ウィキペディア）で一杯になっていた。彼の言葉が蘇る。

——諸外国にも生存者は居るだろう。先進国ならトコロログリアに似たものを開発していたかも知れないし、立派なシェルターを持っていたはずだ。それでもあの衝撃波だ、生存者は多くて全人口の3パーセントといったところだろう。氷河期のようなこの気象条件

が、その数字を減少させている可能性もある。当面、他国からの援助は期待出来ない。君が一人でも多くの人を救うんだ。そして彼等が暮らしてゆける環境を作れ――

半月前までしがない小学校教諭だった僕が随分と大役を仰せつかってしまったものだ。だが、僕がやらねば誰がやる。そんな気になっていたのも確かだ。一步やマリアに速度を合わせる必要のなくなった今、時速60km/hでの巡航が可能だった。予定通りなら往路の半分、三日もあれば農園に着く。母さん、そしてみんな、待っていてくれ。僕は氷を蹴る足に力を込めた。

しかし、一人旅は寂しいものである。話し相手はおろか意識を遣り取りする相手もなしで4時間も氷を蹴り続けていると、人恋しさに気が狂いそうになる。そんなんじゃ長距離トラックのドライバーは勤まらないって？ 対向車もなければサービスエリアにもひとつこひとり居ない状況を想像してみるといい。4時間が10時間にも20時間にも感じられることを知るだろう。新潟中央ジャンクションのバンクも速度を落とすことなく駆け抜ける僕の胸には愛おしい石田真由美嬢の面影が……って、つい半月前に妻子を亡くした男の言う台詞ではないな。電子望遠鏡並みの視力を開放しても、氷の山々が邪魔をして彼女達を残してきた氷のホテルどころかアイスギャングを閉じ込めた氷の檻にさえ視程は届かない。今日はここまでにしておこう。僕は氷でツルツルになった高速道路脇にホバーを寄せて電源を落とした。ソーラーモジュールをスライドさせた荷物に占拠されていない部分には低反発素材のマットが敷かれている。簡易ベッドは快適でソーラーの屋根を閉めれば風雪もしのげる。しかし寂しさは埋まることはなかった。

――脳細胞のひとつひとつを自分の分身として認識せよ――
つまり、生存本能を司る部分だけ起こしておいて体温調整と危険回避に努め、他の部分は休めろということだ。伊都淵さんから植え付けられた知識は就寝時に関する注意事項までこと細やかなものだった。

たった三時間程の睡眠で身も心もリフレッシュされた僕は、すこぶる快適に目覚めた。

——起きている時は不寝番を休ませてやること——

その言いつけを守るべく、生存本能組に休暇を与えてやる。彼は自分の脳細胞を何て呼んでいたっけ……そうそうオイラーズだ。自分の脳細胞と語り合うなんざ分裂症患者に近いのではないかと、と、ボクラーズに問い掛ける僕が居た。何をかいわんやである。ともあれ今日中に石田さん一家を残した氷のホテルにはたどり着いておきたい。僕は出発の準備を始めた。

人間——今の僕がそう呼べるなら——文明などなくても生きて行けるものだ。脳味噌の使い方に精通するだけでいいのだから。遠くだって見えるしバイオナビ機能が目的地まで方向を間違えることなく案内してくれる。犬や熊とだって意思疎通を図れるし、人工筋肉なしでも相当な力を発揮することだって出来るそうだ（これまた伊都淵さんの知識だった）。ただ孤独は辛い。人が生きて行く上で一番大切なものは語り合い笑い合える仲間がいることなのだ、と僕は身に染みて感じていた。

とにかく退屈なのである。江戸時代の飛脚はよくもこんな孤独行に耐えていたものだ。石田一家の救出ありアイスギャングとの遭遇あり、そして高飛車な犬と母性本能の塊のような熊、彼等との会話があった往路とは打って変わって見事に何の変化もない復路だった。時間短縮のため速度を上げることとも考えたが、ローラブレードのベアリングが過熱して保たないだろう。高速道路の追い越し車線を、マイペースな婆さんの乗った車の後ろについて走るようなストレスを感じており、今やアイスギャングとの再会すら待ち遠しくて仕方のない僕であった。氷の檻までの距離は約80km、後一時間とちよいで到着する。

4kmほど先の氷の檻が見えてきた頃、僕を強烈な臭気が襲った。何だこれは？ アイスギャングどもが食い散らかした缶詰の始末を

していなかったにせよ、そう簡単に腐敗が進むはずはない。なにせ気温は氷点下なのだから。臭気には鉄臭さも混じっていた。堪え性のない若者達が食料を争って殴り合いでもしたのだろうか？ と、ほんの一週間程前まで彼等同様堪え性のなかった僕の緩い思惑とは裏腹に、頭に鳴り響くアラームは第一級の警戒警報を発令していた。

ひどい……血溜まりの中に五人のアイスギヤングが横たわっていた。凶器となりそうなものは空き缶のプルタブぐらいしかなかったはずなのだが、仰向けに横たわったのも俯せになったのも、その体からは内臓がすっぽりとなくなっていた。誰がこんな……想像もつかないほどの惨劇が氷の檻の中で繰り広げられたようだった。

その時——空気が動いた。

醜惡のハイブリッド

何だ？ 氷の丘——往路で、今や物言わぬ屍となったアイスギヤング達が姿を現したその丘の向こう、カシャカシャと耳障りな音が聞こえてくる。その音はこの手前4km地点で嗅いだのと同じ臭気と共に近づいてきていた。僕は氷の檻の上に立って音のする方に視線を向ける。ほどなくして丘の頂上に黒光りした体表を持つ十体ほどの何かが姿を現した。

熊でも犬でもない。強いていうなら日焼けサロンで焼き過ぎた人間が四つん這いに伏せたような姿勢でこちらの様子を伺っている。僕は気味悪さで全身が総毛立つのを覚えた。

——君は全身が武器だから——と、伊都淵さんから何の武器も与えられていなかった僕にとって、未知の生物との遭遇は混乱を招く。意識を探ろうと送るどの周波数帯にも相手の反応はなく、強く感じるのは飢餓感と攻撃性のみ。本能のみが奴等の行動原理となっているようだった。

ボクラーズに脳内検索を託すとイトペディアが起動する。昆虫——アレが？ 昆虫といえばカブト虫か蝶といったほのぼのとした種目しか思いつかない僕にとって、目の前の醜惡な存在がどうにもイメージと重ならない。ボクラーズが次なるイメージを提起してくる。ゴキブリだって？ しかし丘に伏せた奴等の顔らしき部分は人間のそれで、微かに聞こえる呼吸音に合わせ黒く隆起する背中が上下している。気門から酸素を取り込む昆虫類は絶対にそんな呼吸法はない。

『ハイブリッド』『トランスジェニック』立て続けに二つの単語が転がり出てきた。

人間にゴキブリの遺伝子導入がなされたのか——信じられないがそうとしか考えられない外見だった。薄明かりの中、奴等はいわじわとこちらに向かって移動を始めた。体表を鈍く光らせて。敏捷

さがゴキブリほどでないのは臂力が人間のそのままなのか。外骨格動物では有り得ないサイズを実現するため、そして肉体の統合性を保つために全ての遺伝子情報を取り込めなかったのだろう。ついでに奴等が飛べないのも確信した。四足歩行をする奴等の背中に上翅は見当たらなかったのだ。

のんびり生物学の講義をしている場合ではない。何せ第一陣が移動を始めた途端、丘の上には同数の第二陣が準備を整えていたのだから。どれだけ居るんだ奴等は……ええいままよ、ゴキブリならこれで撃退出来るだろう。僕は声帯域を通る音波を23000Hzに固定した。

人間ゴキブリーゴキブリ人間？ この際どっちでもいい。一瞬間ゼンマイが切れたように動きを止めた奴等はそそくさと後退を始める。よく見ると腕にあたる部分のすぐ下辺りから一對の節足状のものが生えている。どこの誰があんなデタラメな生き物を作ったんだ……第一陣の撤収が始まると丘の上にあった陣形も姿を消していた。統制はとれているようだ。微かだが意識に引っかった脳波の残滓らしきものを解析する。なんと漢字が混ざっているではないか、奴等はメイド・イン・チャイナだったのか……

莫大な政府財務を抱えながらもプライドだけは高いアメリカが、例え生き残るためとはいえゴキブリの遺伝子導入などするはずはない。あの恥知らずな將軍様の居た特異な思想の国にそれほどの科学力はない。ギリシャに始まった財政破綻が蔓延していたEU諸国にも無理だろう。オイルはふんだんにあるが専らテロにご執心だった国々は宗教には従順だ、遺伝子操作は神への冒瀆、蔑むべき行為だと認識していたはずだ。伊都淵さん流消去法が奴等の正体を明らかにしていた。

『事実は小説より奇なり』とはよく言ったものだ。デイ・アフター・トゥモローにもウォーカーにも、こんな奴等が出てきやなかった。まったくあの国の強欲さと来たら底なしだな、世界中の資源を買い漁るだけでは彼等の欲望は満たされなかったというのか。ああまで

して生き残ろう、世界の支配者たろうとする彼等にとって、この氷で閉ざされた世界で一番大切な資源は食料となったのだろう。それを求め氷で繋がってしまった海を渡ってきたのか。

その昔、父さんはいっていた。祖父が少年だった頃、島国日本は自国にない資源を確保（略奪）しようとして中国に攻め行ったそうだ。有史以来、人類の歴史は侵略と被侵略が繰り返されてきた訳で、今回はたまたま中国が侵略者となっただけのことなのだろう。なんだから僕は物分かりのいい好々爺になってしまったようだ。

——いけないっ！

僕は石田さん一家のことを思い出した。伊都淵さんの言うとおりに地球上の人工のたった2／3パーセントが生存者だったとしても、それが中国なら2600万人が生存している計算になる。そのうちのどれだけが人間ゴキブリとなり、どれだけがこの国に渡ってきているかはわからない。だがあの様子なら目にした生存者を手当たりしだいに食料に変えていただろう。四本足は机以外、空を飛ぶものは飛行機以外何でも食べるという悪食この上ない民族なのだ。僕は氷の檻を飛び降りて先を急いだ。希望と秩序の明かりが灯り始めたこの氷の台地に、嵐の予感を感じ取っていた。

Optimist (楽天家)

遅かったか……

駒ヶ岳サービスエリアに作った氷のホテルの中に人影はない。僕は落胆に肩を落とした。多少、時間はかかっても彼等を同行させていれば……悔恨は尽きることなく僕の胸に溢れてきた。氷の檻で見たような血痕はなかったが、積み上げられていたはずのダンボール箱は散乱し、中身のなくなった缶があちこちに放り出されている。

「血液型は整頓好きのAだ」といった真由美さんとその母親が居て、この散らかりようはない。組織的に襲撃を仕掛けてきたゴキブリ人間どもの数を思い出す。人の良さそうな父親だけが男性のパーティーでは、奴等の急襲に為すすべなく保存食として連れ去られたと考えるのが自然だった。僕の背中が見えなくなっても手を振り続けてくれた真由美さんのチャーミングな顎のホクロが記憶の中でクロージアアップされていた。

僕は、はたと気づいた。緊急避難用にと石田一家に教えておいた、掘り起こし放置されたままの地下タンクがあったはずだ。一縷の希望に縋って氷のホテルの裏手へと回った——誰かひとりだけでも助かっていてはくれないものかと。

「石田さん、居ませんかー？」

加減して叩いたつもりだが屋外に放置され錆の吹き出した地下タンクは大きく凹んでしまう。耳を済ませてみるが反応はない。僕はもう一度肩を落として回れ右をした。その時だった。常人の感覚では捉えられないほど小さな空気の揺れを感じた。タンクに登って点検口に被せられた直径50〜60cmほどの蓋を開くと、聞き覚えのある涼やかな声が僕の耳に届いた。

「小野木……さん？」

「そうです。ご無事でしたか」

真由美さんの心細げな顔が僕の照らすLEDランプの中に浮かび

上がる。彼女は手をかざし、顔を横に振った。残念ながら眩しかったのは僕の笑顔ではなかったようだ。

「ご両親は？」

「寝てます」

僕は円筒形のタンクから滑り落ちそうになった。この状況でよくも寝ていられるもんだ。しかし何故ここに？ 緊急用とは告げてあったがゴキブリ人間どもが襲ってきてからでは、ここまで逃げてくる余裕などなかったはずだ。そのままの疑問を真由美さんにぶつける。

「世界がこんなになっちゃったのに、お父さんったらビールを飲みたがって仕方なかったんです。最初のうちは母も大目に見ていました、そのうち1本が2本になりで……」

石田博氏が無類のアルコール好きだったのは救出した時の様子から分かつてはいたが、死んだ父同様、さほどアルコールに強くない僕に、所謂？大酒飲み？の気持ちは理解出来ない。

「怒った母がビールの箱をタンクの中に放り込んだんです。

そうしたら父は、万が一のためにタンクに入れるかどうか試してみよう、と言い出して――ほらあの体型でしょう？」

確かにあの立派なお腹がこの狭い通路を通り抜けられるかどうかの不安はあったろう。だが彼の目的が他にあったのも疑いような事実だ。

「それで？」

真由美さんが奥で眠りこけているはずの両親の方をちらと見やる。バツが悪そうな顔をしていた。

「入ったはいいけど出られなくなってしまったんです。タンクの中はとっかかりになるものも何もなくって。それで小野木さんが戻ってくるまで、そこに居なさいって母が……」

「ええ、でも真由美さんとお母さんまで中に居らしたのは何故ですか？」

「父を引っ張りあげようとしたんです。でも小柄な母やあたしでは

……」

そう言うとき真由美さんはペロリと舌を出した。重量級の父親を引っ張りあげようとして結局、二人とも引っ張り込まれたしまったという訳か……漫画みたいな一家だな。僕は思わず声を上げて笑ってしまった。彼女も釣られてエヘへと笑う。タンクの奥からは大小二種類の鯨が聞こえてくる。この一家なら大抵の災害は乗り切ることが出来ただろう。

食料なし、ビールのみで六日間のタンク生活を送る羽目となった石田さん一家は、コンビニの店内から救い出した時同様、旺盛な食欲を示した。ホバーの上で胡座をかいて缶詰を頬張る石田博氏の姿は、杜都市で別れたマリアを彷彿とさせた。

「すると、杜都市には大勢の生存者が？」

「そうです。これから行く中ノ原市にも氷のドームを作る予定です。完成には約一ヶ月を要します。どちらに住まわれるかはご家族で協議してお決めになって下さい」

「そりゃあ先に工事に着工している杜都市だろう。東北のカリスマが居るならなにかと安心だし」

「でも、それだとまた小野木さんに迷惑をかけちゃうんじゃない？」
博氏の奥さんが僕の方を見て言った。

「次の東北行きが僕の担当になるのかどうかは分かりません。伊都……東北のカリスマの判断に委ねてありますから」

「じゃあ、あなたはどこに？」

「は？」

真由美さんの問い掛けに僕はドギマギしてしまった。「あなたと一緒に居たい」と言われた訳でもないのに、だ。特段目立った容姿ではない。スタイルも梓先生のようなモデル並みといった風でもないのだが、初めて見た時から僕を魅了して離さない何かがある。彼女にはあった。「慌てて結婚なんかするんじゃないぞ、遺伝子が求め合う女性が必ずどこかに居るからな」小学生だった僕に父親が言った言葉が蘇っていた。

「ええっと、ですからカリスマ次第なんですが、ドームの建造がある程度進むまでは多分農園、中ノ原市に居ることになると思いますふ」

素敵なお姉さまの前で萎縮するチェリーボーイ同然となった僕が慌ててそう付け加える。何やら発音まで怪しくなってしまうている。真由美さんはふっと唇を緩めて言った。

「じゃあ決まりね。命の恩人にお礼らしいお礼も出来ていないんですもの、何かお手伝いさせてもらわなきゃ。いいでしょ？」

水を向けられた彼女のご両親は、なるほど、といった感じでこくりと頷いた。真っ直ぐに見つめてくるやや吊り目がちな彼女の瞳に、僕は吸い込まれて行きそうになった。

合流

「大丈夫？ 辛くないですか？」

真由美さんが心配げに声をかけてくる。恐らく僕が口を開きっぱなしだったせいだろう。しかし僕は4コーナーを抜けて最後の直線に入った馬ではない。ゴキブリ人間どもを寄せ付けないがために23000Hzの音波を出しながら疾走していたのだ。彼女にはそれが苦悶の表情に見えたのだろう。

「ホバーは浮いてますからね。引っ張り始めだけですよ負担を感じるのは」

とは言え大人三人、しかも博氏は重量級である。常人なら巡航域に入るまでに相当の時間と体力を要したことだろう。しかし好意を抱く女性に「僕は、いざとなれば数トンの力を出せるバケモノですから大丈夫」などと誰が伝えられよう。どのみち僕以外がこれを引くことのない限りバレル心配はないのだ。石田さん一家の目には？ 頼り甲斐のある力持ちの青年？ としか映らないはずだった。例えば女性用のハーフコートを着ていようとも。

しかし時速60km/hで口を開けての疾走は喉が乾く。30分置きに足を止めて水分補給をする必要があった。ホバーの上で缶ビールを溶かしながらチビチビとやっている博氏のお気楽さが羨ましい。少々、呂律も怪しくなっていた。

「遠いところ？ そろ農園とやらは」

後ろを振り返っている訳には行かないし窓の閉まった車でもない以上、返事をしたところで、博氏に届いたかどうかも疑問だ。聞こえなかったふりをして真由美さんにだけ届くよう短く意識を送った。「一時間弱ってとこじゃない？ あれ？ 何であたしそんなこと知っているんだろう」

上手くいった。こうやって彼女の気を——いけない、いけない——いい人間に意識操作をしてはならない。それは伊都淵さんの厳命

だった。

ほぼ予定通りに中ノ原インターチェンジを降り、かつてバイパスだった道を農園へと向かう。八歳の時に離れて以来、およそ十五年ぶりとなる農園だった。少し雲が薄れた程度では昔の面影を期待することは出来ない。何せこの国は南極だった座標に位置しているのだから。トコログリアがなければ生きて行くことすらままならないのが現状なのだ。

木々は衝撃波でなぎ倒されていたか凍りついていたが、見覚えのある地形が標準視野の中に入ってきた。車道側から登って行けば母屋のあった場所がシェルターの入り口になっていると、雄さんは衛星電話で告げていた。

「ここです」

真由美さんと石田さんの奥さんが丘陵の頂を見上げる。僕は最後の難関たる緩斜面——とは言え五分の一勾配である——を登ろうとするのだが車道の始点は大きくUターンしていて助走がつけられず、20m程登ってははずると滑り落ちてしまう。僕は仕方なく四つん這いで登ることにした。やれやれ、これではゴキブリ人間と同じではないか。手伝いを申し出てくれてもいい石田博氏は大軒をかいていらっしやった。

到着を知らせるべく鉄の扉を氷の塊で叩く。何だか原始人になったような気分だった。跳ね上げ戸がギリギリと開き始め、警戒に目を光らせた雄さんの浅黒い顔がのぞいた。

「丈か！ 無事だったんだな。おーいみんな、丈が戻ったぞー」

未だかつてこんな嬉しそうな顔をする雄さんを見たことがない。有名なボクサーだった彼は、いつもストイックに心身の摂理を追い求め、カジさんが乗り移ったかのような無表情でトレーニングに励んでいるものだ。なにも宇宙旅行をしてきた訳ではない。東北の、青森よりずっと近くの杜都市を往復しただけだ。平時なら何でもないような事を飛び上がらんばかりに喜んでくれる雄さんに、僕は胸

に熱い物を感じていた。

杜都市程ではないが、かなり大規模なシェルターだった。ここにはどれだけの生存者が居るんだろう？母や生徒達は元気にしているだろうか。ゴキブリ人間の気配がないことを確かめて石田さん一家をホバーから降ろす。寝ぼけていたのか酔っ払っていたのか、博氏は僕をタクシーの運転手と勘違いされたようで「幾ら？」と訊ねて胸ポケット辺りを探っている。財布でも探していらいしたようだ。

僕は雄さんの案内でシェルター奥の区画へと進んだ。涙で顔をぐしょぐしょにした母、懐かしい誠さんと剛さんの顔、無事だった子供達とスーザンの歓待に僕は涙が出そうになった。

「じゃあ、ここにも？」

「ああ、シェルターの扉を開けるまでの知恵はないようだな。今のところ誰も襲われてはいない。奴等が最初に姿を見せたのはお前が杜都市を発った後だった。道中のお前に連絡を取る方法がなくなって心配していたが無事で何よりだ。アレは一体なんなんだ？」

「伊都淵さんに詰め込まれた知識を借りての推測ですが、中国が人体にゴキブリの遺伝子導入を行なったんだと思います。ただ、あれは失敗作ですね。えらい中途半端なところで融合が終わっていましたから」

母達の歓待もそこそこに、僕は雄さんに呼び出されてシェルター入り口右手にある区画に居た。色々と報告せねばならないこともあったし、雄さん達は雄さん達でゴキブリ人間の情報を欲しがっていた。

住人が増えたのと女性も居るということで誠さんが間仕切りを作り、ワンルームだったシェルターを区分けしたのだそうだ。誠さんの手先の器用さは僕がここに住んでいた頃から農園スタッフの中でも抜きん出ていた。そして何を隠そう僕は不器用この上ない。太くて短い指で器用に道具を操る誠さんに憧れたものだった。そんなどうでもいい回想にお構いなしで雄さんは続ける。

「杜都市には、まだ奴等は現れていないそうだ。だから伊都淵さんの所見も聞けていないのが現状だ。丈がそう判断したのなら間違いはないだろう」

「だけど、あんなのが居たらドームなんて作れないじゃないか」

それまで黙っていた誠さんが割って入ってきた。確かにその通りだが、手先の器用さではカジさんに勝るとも劣らない誠さんである。伊都淵さんに設計してもらえば音波発生装置ぐらい作れるのではないか？ 僕はそれを提案をする。

「ははあ、デカくなろうが人間と混ざろうが嫌いな音波に変化はない訳か。よし、作ってみよう。雄、次の連絡をする時に伊都淵さんに聞いておいてくれ」

誠さんが腕ぶす。

「バイナリ地熱発電も見直す必要があります。それとドームを作るにはバイオ流体緩衝材も大量に必要となります。こちらでも培養するようにとの伊都淵の指示です。培養槽と胚はホバーに積んであります。ドーム建造の工程表とガスタービン発電機的设计図も預かってきています」

僕は銀色に輝くUSBメモリをポケットから取り出して誠さんに渡した。

「ガス容器はホバーにあります。途中でスーパーの配送トラックから失敬してきた食料もそこに。取ってきます」

「手伝おう。おいっ」

奥に控えていた男性四人を伴って、僕は再び氷の世界へ続く階段へと向かった。少しだけ気になったのは剛さんの元気のなさだった。

「出来そうですか？」

音波発生器の設計部が描かれたパソコン画面を眺める誠さんの背中を掛ける。

「発振器そのものは何とかなりそうだ。デカイスピーカが欲しいな」
「その辺りに転がっている車から拝借してきましょう。他に必要な

ものは？」

「カーオーディオやナビがあれば集めてきてもらうと有難い。半導体は用途が多いからな。反響板を作るのに金属のパネルも欲しい。倒れた看板や車のボンネットを剥がしてきれくれ」

「わかりました」

「簡単にメタンハイグレートの鉱床が見つければいいが、楽観は出来ない。プロパンガスの容器も探してみてくれ」

どちらかといえばのんびり屋だった誠さんも真剣な目になっていた。

「了解です」

大き過ぎてシェルターに運び込めなかったガス容器は屋外に放置してある。培養槽は分解して持ち込んだものの、どの区画も狭くて入りきらない。屈強そうな（あくまでも一般人のレベルとして）男性達が仕切り板を外して手前二つの区画を繋げる作業をしている。

僕は雄さんに訊ねた。

「所教授と梓先生は連れてこなかったんですか？」

「このシェルターには設備がないってことでラボに残られたよ。衛星電話はあっちにも置いてきたが、屋外でないと繋がらない。余程の事態でも起きない限り、奴等が居る可能性のある外には出て欲しくない。同じ理由でこちらからの連絡も控えている」

「僕が行って連れてきましようか？ 櫓とホバーがあればある程度は機器も運べると思います。犬達は借りられますか？」

「そうすべきなのかも知れないが……伊都淵さんに相談してみよう。丈は少し休んでおくといい」

なるほど、最初から飛ばし過ぎて息切れしてしまうがなというところか。休める時には休んでおこう。僕は歓待の仕切り直しのため、広く仕切られた奥の区画へと向かった。ちなみにこれは洒落ではない。

対決

集会所を兼ねた奥の区画は、このシェルター内で一番の広さを持つており、培養槽の設置作業にかかっている以外の人々が勢揃いしていた。新たにシェルターの仲間に加わった石田さん一家もすっかり打ち解けた様子で、僕は人々と談笑する彼等を微笑ましく眺めていた。

「先生、お帰り」

走り寄ってきた西村太と林田沙織が満面の笑顔を向けてくれる。旅の苦勞が報われる瞬間である。

「ただいま。こうなっちゃってからゆっくり話している暇もなかったな。教科書は持っているか？ 授業を再会するぞ」

「えー」

二人は僕の冗談に大仰に驚いてくれる。そんな日が戻ってくれることを願ってはいたが「その日を待とう」と子供達に告げられるだけの根拠も自信もなかった。

「ご苦勞様。この旅があんたを一人前にしてくれたみたいね。父さんによく似た面構えになっちゃって」

そしてあれだけ気丈だった母は、めっきり涙脆くなっていたようだ。"父親に似た？"という言葉が聞かされても、僕は以前ほど不快ではなくなっていた。

「息子さんでしたか、彼は我々の命の恩人です」

母の手を両手で握ってブンブン振り回す石田博氏だった、何日かぶりに完全に風雪から遮断される環境に安心したのか、座ったままうつらうつらする石田さんの奥さん。自己紹介前で名前は分からないが実直そうなご主人と向う意気の強そうな息子のいる五大家族、とシェルターの住人は二十名を超えていた。ドーム建造を急がないと――伊都淵さんは人を集めろといっていたが、このままでは生存者を発見しても収容する場所がなくなってしまうのは確実だった。

こうして生存者の顔ぶれを見ていて気づいたことがある。氷漬けの死体やホモローチとの遭遇にキヤーキヤー泣き叫ばないだけの落ち着きというか分別、彼等にはそれが備わっていたようだ。悲鳴は更なる混乱を招き、弱さと敵を呼び寄せるものだ。危機に瀕した時こそ冷静に対応出来ることが災禍を生き延びるのに必要な要素なのではないだろうか。それは大人も子供も同じことが言える。

僕は誠さんにいわれた材料を集めるためシェルターを出た。氷で銀色に舗装された国道に出た辺りからゴキブリ人間の気配が伝わってくる。音波を出せば遠ざかり、口を閉じればまた近づいてくる。まあ、なんとかなるだろう。相手の出方もわからなきゃ、間近で見たのも一回こっきり。考えてみたところで詮無い話だった。

作業は単純だ。氷漬けになった車から氷をかき落としてドアを引っ剥がし――殆どの車が施錠などされてはおらず老若男女の冷凍マグローが運転席を占有していたが――オーディオや電子部品らしき筐体を傷めることないよう取り外して（これが人口筋肉の僕には案外骨である）ホバーに積み込んでゆくだけだ。たまに氷を取り除いたら自販機が積み重なっていたりということもあったが所有権を主張されなくなった車は腐るほどある。僕は意識してワンボックスワゴンを避けた。冷凍マグローの家族を見たくはなかったのだ。

殆ど減っていない50kg容器的プロパンガスを倒壊した建物の瓦礫の中に見つけた。ホバーの下に束ねて敷く。次はスピーカーだ。まだ人工皮膚が上手く馴染んでいないため、ドアパネルごと持って帰ることにする。鉄板は反響板に使えるだろうし、元来が不器用な僕に小さなスクリューを回してスピーカを外すといった作業には不向きだからだ。反響板は大きければ大きなほどよいはずだ。僕は看板を探すことにした。どうせ誠さんが折り曲げたり溶接したりして成型するのだろうが、ドアパネルはサイズの割に重かった。なるべく面積の大きな金属パネルを探すとすると、やはり看板に限られてしまう。

農園を離れてかなりの年月が経っていた。タコが自分の足を食べて行くような経済政策しか思いつかない政府のお陰で多くの店舗は倒産へと追いやられ、そしてまた新しい店へととって代わる。比較的那の新陳代謝が目立たない業種がパチンコ・スロットの類だった。だっ広い駐車場跡に建物が崩れ落ち、造成中の工事現場みたいになっている場所があった。ここにならあるんじゃないか？ 僕は氷に覆われたオブジェの原型推察にも長けてきていた。

？出ます！ 出します！ ●●チンコ？ 屋号と？パ？の字が消えて、とてつもなく下品になったキャッチコピーが氷の中から姿を現す。僕は苦笑を浮かべてそれを引き剥がしにかかった。

座標が南極になろうと他の星に來た訳ではない。建造物は倒壊していても氷さえ掘り起こしてゆけば生活に必要なものはほぼ見つけられるものだ。僕は学校の隣を流れる川の橋のたもとで暮らしていたらした人々の気持ちがわかるようになっていた。

これだけあれば充分だろう。戦利品で山盛りになったホバーを引いて帰ろうとした時、ゴキブリ人間どもの気配が近づいていたことに気づいた。しかし今回は敢えて音波を発しない。奴等の生態を観察してやろうと思っていた。

身を潜めるところなどない駐車場跡だった。僕の周囲を円形に取り囲んだゴキブリ人間どもはその間隙をじわじわ詰めてくる。だが、ある一定の距離で接近を止めていた。僕は考えた。氷の檻で遭遇した時は缶詰などの食料を持っていたが今は身ひとつ。所謂、着の身着のまま、木の実ナナという現況だった（父さんがよく口にしたジョークである）。奴等が臭覚で獲物を嗅ぎ当てているとすれば、四肢が人工筋肉と人工皮膚、おまけに骨までもが作り物の僕に食欲を示すのだろうか、そんな可能性も考えていた。

内臓を根こそぎ喰い尽くされていたアイスギャング達同様、背骨が通っている部分は僕のオリジナルだったが、世の中に口臭のひどい人間は居ても、内臓臭を漂わせている人間は多分居ない。そしてよしんば戦闘になったとしても、足でまといになったろう石田さん

一家を連れていた時とは状況が違う。看板の柱に使われていた鉄柱を引きちぎると、僕は一步前に踏み出した。

正面のゴキブリ人間が下がって、背後の奴等が前身する。僕が後退すると奴等はその逆の動作をとった。僕を囲む連中の輪は約15mの直径のまま一向に変化しない。そのまま三分も経つだろうか。焦れて行動を起こしたのは若干二十三歳の堪え性のない若造、つまり僕の方だった。直径15センチ長さが5mほどの鉄パイプを振り回しながらゴキブリ人間の輪に向かって走り出す。奴らは蜘蛛の子を散らすように逃げたかと思うと、僕が足を止めた時点で再び包囲網を張り巡らす。埒があかない、正にそんな状況になっていた。

頭の中で電卓を叩く必要すらなく奴等の数を知った。ひとり——いや、一匹か？それが占有する幅が約70cmとして隙間なく並んで47・1mの輪を作っているのだから58・9匹が居る計算となる。小数点は有り得ないので繰り上げておこう、59匹だ。如意棒を振り回す孫悟空よろしく鉄パイプでゴキブリ人間をなぎ倒してゆけば活路は開ける。一秒間に体長の50倍を移動するのはゴキブリのオリジナルの方で、不完全に融合なったゴキブリ人間ではない。僕がそれに踏み切れずにいたのはマリアの例があったからだ。最初は殺す、殺すと言っていたマリアも誤解が解ければ彼女も気のいい母熊だった。上手くゴキブリ人間を説得することが出来、ドーム建造の労働力になってくれればこんな嬉しい話はない。世界はひとつ、人類はみな兄弟——のはずだった。

突然ゴキブリ人間が跳躍して襲いかかってきた。降りかかる火の粉は払わねばならぬ江戸の空。って誰の思考なんだ、これは……

超視覚を開放すれば、人類よりいくらか俊敏なゴキブリ人間の動作もスローモーションとしか映らない。ただ戦闘そのものが初めてだった僕に欠けていたものがある。手加減というヤツだ。比較的装甲の硬い背中側に当たっても、数トンの力かけることの5mのトルクで振り回される鉄パイプは、いとも簡単にゴキブリ人間の体をまっ平たつに切り裂いてゆく。太い鉄パイプが鋭利な刃物のように感

じられた。どす黒い体液を垂れ流して、あつという間に死骸の山が出来上がって行く。ひよつとすると僕には殺戮者の素養があったのかも知れない。陶然としかけた僕の脳裏に伊都淵さんの警告が響いた。

——無益な殺生はするな——

僕は鉄パイプを振り回すのを止め、オプションを選択した。23000Hzの音波を発したのだ。奴等に退却を促すつもりだった。

サイトカイン・ストーム

退却を始めたゴキブリ人間たちの頭部が熟れたザクロのように破裂してゆく。どの個体も同じように体液に似たどす黒く変色した脳髓を撒き散らし、その飛沫は僕の足元にも飛んできた。僕は焦った。以前は逃げ出ただけだったじゃないか。距離が接近していたからなのか？ いや、あの時とそう変わらないはずだ。イトペディアにアクセスしても回答は得られない。あの時点で伊都淵さんが未接触であったゴキブリ人間の情報などなくて当然だ。

僕は自分がとんでもないことをしたことに気づいた。どう転んでも敵わない伊都淵さんより早くゴキブリ人間対策を講じて、更に彼等を懐柔することが出来れば、みんなの前でいい格好が出来るのではないか、真由美さんに頼もしい男だと思ってもらえるのではないか、そんな功名心に駆られていただけだった。そう、氷の上に転がる数十体の亡骸は彼等だ。異形のハイブリッドに姿を変えていたとはいえ元は紛れもなく人間だったのだ。

《殺らなきゃ殺られていたんだ。仕方ないじゃないか》

《追い払うことだって出来たのに、僕はそうしなかった。それに彼等を切り裂いていた時、僕は愉悦に浸ってさえいた。あの気の弱かった僕が……》

後悔は絶え間なく押し寄せてくる。何がリーダーだ、伊都淵さんに持ち上げられていい気になっていただけじゃないか。ガランと音を立てて鉄パイプが転げ落ちる。膝の力が抜け、涙が溢れ出した。9・02直前に存在が確認されたタキオン粒子があれば、それに乗って時間を逆行したくなかった。

「タケ坊の奴、遅くないか？」

作業の手を止めることなく誠が雄一郎に訊ねた。

「そうだな、出掛けてもう4時間になる。あの体だ、心配したこと

はないと思うが見てこよう。衛星電話を持って行くぞ」

ガスタービン発電機の配管をしていた雄一郎が立ち上がって腰を伸ばす。

梓先生が言った通りなら、相手が何であろうと丈の体に指一本触れることは出来ないだろう。そうは思うのだが、茫漠とした不安が雄一郎にはあった。じっと右手を見つめる。中山達との闘いで意思があるかのように動いたそれと同じものを丈は持っている。まだまだ精神的に未成熟な丈が自身の発揮する力に酔いしれて暴走してしまふ危険がないとは言えない。「導いてやってくれ」伊都淵からもそう言われていた。だが、それが自分に務まるのだろうかといった不安もあった。『動いてこそ見つかる答えもあるってもんだ』今は亡き農園オーナーの――丈の父親の言葉を思い出す。とにかく丈を見つめよう。ローラーブレードに足を通し、クロスボウを手に取る。と雄一郎は一気に緩斜面を駆け下りて行った。

かつて国道だった場所に出てすぐ雄一郎は強烈な臭気に襲われた。何だ、この臭いは……クロスボウを左手に構える。見渡す視界の中、氷に出来た斑点の様に横たわる茶褐色の個体は頭部らしき部分が破裂して黒っぽいジェル状の物を流出させていた。死んでいるのか？

雄一郎はおそろおそろ近づいてみる。間近で見たことがなかったため、それがゴキブリ人間の死骸だと認識するまでに少し時間がかかった。流れ出ていたのは脳漿のようだった。これほどの数が居たのか……いや、もしかするとこれでも全部ではないのかも知れない――丈はどこにいる。

俄に丈の安否が気になった雄一郎は異形の屍の間を縫って走り出す。こいつ等は何故死んでいるのだろう。丈がやったのだろうか？ そんな事を考えながら数キロ程走った時、見覚えのある赤いコートが目についた。膝について俯いているように見える。

「丈っ！ 丈なのか？」

雄一郎の呼び掛けにも返事はない。積み重なった異形の残骸を回り込んで赤いコートに駆け寄った。

「丈……怪我はないか？　これはお前がやったのか？」

力なく顔を上げる丈の目はゴーグルのレンズが曇って見えない。
泣いているようだった。

「雄……さん、僕は人殺しです」

そう言っただけで丈はまた俯いてしゃくり上げる。雄一郎は衛星電話を取り出した。

——雄一郎か、どうした？

「伊都淵さんをお願いします」

電話に出たカジが伊都淵を呼んでいる様子があった。

「何かあったようだな」

脳波を読むことの出来ない電話越しでも伊都淵の勘の鋭さは人並み外れて優れている。明らかに何かを察知している口調だった。雄一郎は推察を混じえて現状と丈の様子を伝えた。

——頭部が？　実はこっちもマリアが——君が襲われかけた熊のことだ。丈君から話は訊いているだろう。彼女が一体捕獲してきたんだ。それで尋問しようとしたらいきなりバン！　頭が破裂して死んでしまったよ。

「それも丈がやったんでしょうか？　こいつ、随分ショックを受けているみたいなんです」

——おいおい、丈君はバケモノじゃないんだぞ。800kmも離れた場所から思念で命を奪うなんてことは出来んよ。これはきっとサイトカイン・ストームだろうな。

「サイトカイン……何ですか？　それは」

——おそらく彼等にはアデノウイルスをベクターに使った遺伝子導入がなされたんだと思う。そんな時代遅れの方法でゲノム（DNA塩基）量も染色体の数も違う異種間が上手く融合するはずはないんだ。免疫系が異形の細胞をウィルスと判断して攻撃を加えたんじゃないかな。放っておいてもホモローチの第一世代は勝手に死滅するだろう。

「ホモローチ？　それが奴等の名前なんですか？」

——ホモサピエンスとコックローチのトランスジェニックだからホモローチ、ゴキブリ人間じゃあ語呂が悪いだろう。

命名を得意気に語る伊都淵は雄一郎に褒めて欲しいようでもあったが、今はそれに取り合っている場合ではない。

「専門的なことはよくわかりませんが、これは丈がやったのではない訳ですね？」

——奴等の死体は頭部が破裂したもののばかりなのかい？

「いえ、体が半分になっているものもあります」

雄一郎は丈を取り囲むようにして積み重なった死骸を見て言った。電話の向こう、黙り込んだ伊都淵は何か考えているようだった。

——何体かは丈君がやったのかも知れないな。彼と代わってくれるか。

「伊都淵さんだ」

そこに居るはずの雄さんの声が遠くで聞こえるような気がしてならない。手渡された衛星電話に僕は耳を近づけた。

——何体殺したんだ？

一時も休むことなく襲いかかる悔恨に苛まれていた僕に、ダイレクトに訊いてくる伊都淵さんだった。僕は電話を取り落としそうになった。

「……多分、六十人ほどだと思います」

——雄一郎君にも話したが頭が破裂した連中は君のせいじゃない。「本当ですか？」

気休めではないのだろうか？　だが、顔を上げて見た一面にゴキブリ人間の死骸が散乱している。僕の知らない何かが彼等に作用したのかも知れないと、思えるようになっていた。

——ああ、詳しいことは雄一郎君の意識を読んでくれ。確かに彼等も元は人間だったが意思を交わすことは不可能だったろう？　私がそれを試す前に死んでしまったが、マリアと一緒に居た依子の話では意識らしい意識は持っていなかったそうだ。今回のことは襲っ

てきた連中から身を守るためだった思うしかない。そして早く君自身の能力を掌握しろ。

雄さんの意識からサイトカイン・ストームの情報を仕入れる。それでも僕は十人程殺してしまっていた。許されることではない。「はあ」と弱々しい声が洩れる。自分の声ではないような気がした。

——君の出発前にも言ったが、時間がどれだけ残されているかはわからないんだ。そうやってメソメソしている時間があるならドームの建造を進めろ。君のせいで生き残っている人々の命が危険にさらされるとしたら、それこそ後悔してもし切れるもんじゃないぞ。傍に居れば背中のひとつも張ってやりたいところだが、そうもいかん。自分で立ち直れ。過ぎた事を気にしても始まらないぞ。君は失敗をしてはいけなくと考えているんじゃないか？ だとしたら大間違いだ。人類の歴史そのものが失敗の連続に過ぎないんだから。戦争然り、科学然り、政治や経済だってそうだろう。失敗は糧にするんだ。

伊都淵さんの言葉は厳しく僕に降り注ぐ。そうだ、僕はシェルターの人々を守らねばならないんだ。母を、子供達を——

——君はまだ成長途上だ。命を奪った行為を容認する訳ではないが、彼等は君が手を下さなくても死んでゆく運命だった。小さな子供が蝶の羽根を塗ったりもするだろう？ そしてそれがいけないことだと学んで行く、成長ってはそうゆうものだよ。この俺だってガキの頃はカエルの肛門に爆竹を突っ込んでみたりヘビを小間結びにしたりもした。そのくらい誰だって通る道じゃないか」

いや、幾ら何でもそこまでは……とにかく、伊都淵さんの言わんとすることはわかった。彼の子供時代が相当な腕白坊主だったことも。そして闘うということは相手を打ちのめすばかりではないということを伊都淵さんは伝えようとしてくれていた。

「ご迷惑をおかけしました。もう大丈夫です。ドームの建造にかかります」

「その意気だ」

僕は電話を雄さんに返して立ち上がった。雄さんもホッとした顔になっている。

「丈は優し過ぎる。俺もシェルターを奪い返す時、6人殺している」
ならず者どもに奪われたシェルターの奪回作戦については誠さんや伊藤さんから何度も聞かされていた。その6人については雄さんが直接手を下したのではないということも。

「でも、やむを得ないことだったんでしょ？」

「あのまま生きながらえてくれればとも思ったが、怪我の手当もせず放置したのは間違いなく俺の判断だ。命を奪う行為をやむを得ないとは、お前の親父さんだったら絶対に言わなかったろうな。それを俺はやったんだ」

僕ならどうしていただろう？ 真っ先に頭に浮かんだ疑問はそれだった。罪のない命を守るため、時として力に訴えなければいけない場合だってある。雄さんの選択は正にそうだったはずだ。だが僕にそれが出来たかと問われれば自信を持って答えることは出来ない。返答の代わりに僕は言った。

「帰りましょう。戦利品を誠さんに見てもらわないと」

「そうだな。戻ろう」

僕達はホバーがゴキブリ人間の死骸に接触しないよう、注意して足を進めた。

再生への狼煙

それからの僕は一心不乱に氷のドームの建造に励んだ。所先生ご夫妻にいただいた体は労せずして氷のブロックを積み上げることが出来たし、伊藤さんが重機のリース会社跡を見つけてきたので発電機と数基の重機も運び上げた。雄さんと二人でガソリンスタンドの地下タンクを掘り起こすと燃料の心配もなくなった。僕と雄さんの臂力については誰に語った訳ではないが、このコミュニティにおいて周知のものとなっていたようだ。数トン、或いはそれ以上の重機を引っ張り上げてくるのだから当たり前といえば当たり前の話なのだが。

シエルターには文化的な生活が取り戻されていた。寝る間も惜しんで作業にあたる僕を母は心配そうに見ていたが、じっとしているとホモローチの体を切り裂いた時の感触が蘇って心が掻き乱されそうになる。僕は誰よりも早く起きてドームの建造を進めた。

「少しは眠れよ」

跳ね上げ戸から顔を覗かせて雄さんが言った。

「P300Aのせいでしょうか。三時間も眠れば心身ともにスッキリしちゃうんですよ」

三時間の睡眠で充分であることは本当だったが、レム睡眠期に見る夢は悪鬼の如き形相の僕がホモローチの殺戮を繰り返すシーンばかりだった。それが怖くて僕はこの二週間殆ど眠っていなかった。

「どれ、手伝おう」

雄さんは僕が積み上げた氷のブロックの表面を均し始めた。そこに食塩水をかけて上に重ねれば、伊都淵さんの言った通り漆喰もコンクリートも必要とせず、強固で断熱性に富んだ壁が出来上がってゆく。

「早いな、まだ五時前だぞ」

寝惚け眼の誠さんも外に出てきた。うるさくしたつもりはないが

娯楽らしい娯楽のないこの世界では早寝早起きが習慣となってしまう。「さあ仕事だ」の号令などなくともドーム建造の現場にはスタッフが勢揃いしていた。あの9・02は夏の出来事であった。軽装だった人々は毛布や布切れを纏って寒さをしのいでいたが、今は僕がある倉庫の残骸から見つけ出してきた冬の建築現場の作業員が着るようなハーフコートが全員に行き渡っている。オリーブ色だったりネイビーブルーだったりエンジ色だったりしたが、住人のユニフォームの様になっていた。僕が大雑把に氷を割ると誠さん達がチエーンソーや丸鋸を使って長方形に仕上げて行く。半月程で壁となる部分は9割方完成していた。

「朝食ができましたよー」

真由美さんの声が聞こえた。跳ね上げ戸から上半身だけを出し、口に手を添えて叫んだ後、目が合った僕に微笑みかけてくれた。僕の中に堆積していた重苦しさが取り払われてゆくようだった。

順応性という言葉は女性のためにあるものだと思っていたが、この状況を受け入れて尚、気が狂れることなく未来を築き上げて行くこととする人々を見ると、それは人類の粘り強さを表現したものではないかとも思える。新しい発見も約束された将来もないこの状況で、人々は他愛のない冗談を口にし合う。時に笑い、時に手を叩いて食事を楽しんでいた。

「どうしたの？ 元氣ないわね」

僕に声を掛けてきたのはエンジのハーフコートを着たスーザンだった。すっかりシェルターの仲間に溶け込んだ彼女が雄さんに並々ならぬ関心を抱いていることを僕は気づいていた。しかしスーザンからしきりに送られる秋波さえ気づかない雄さんは朴念仁を絵に描いたような人物だった。『他人の恋路を邪魔する奴は馬に蹴られて死んでしまえ』と言われようが、スーザンと雄さんが似合いのカップルになるとは思えなかった。

「そんなことないですよ。食欲もありますし」

「ならいいんだけどさ。ねえ、雄一郎さんって独身よね？　彼女は居るのかしら？」

ほら来た。ここで迂闊に話に乗っかるとエンジェルの役目を仰せつかることとなる。僕は空とぼけることで大任を回避する。

「さあ？　8歳の時にここを出て以来、逢ってませんでしたから。直接本人に訊ねてみたらどうです？」

「そっか、じゃあいい」

スーザンは橋頭堡を誠さんに託したようだ。僕に背中を向け、誠さんの腕に自分の手を置いて話し始めていた。誠さんがあらぬ誤解をしませんように。

「――ないの？」

「……え？」

僕は眠っていたようだ。食器の乗ったトレイを指差して何か言っていたのは石田さんの奥さんだった。

「もう食べないの？　体調でもすぐれない？」

「いえ、大丈夫です。すみません、食器は下げて洗っておきますから休んでいて下さい」

「そんなことを命の恩人にさせられると思って？」

未だに二言目には「命の恩人？」と石田さん一家は僕を呼ぶ。照れくさくて仕方ない。

「あの状況下で、生存者を見つけたら誰だって同じことをしたでしょう。通りかかったのがたまたま僕だっただけです。だから、それはもう止めて下さい」

「そうかも知れないわね……でも本当は別の人が私を助けに来てくれるはずだったの」

石田さんの奥さんの視線が彼方に向けられた。

「地球最後の日には何があろうと助けに行く、そう言った人がいたわ。最後まで嘘つきだったのよね、あの人は」

石田さんの奥さんの瞳はどこか寂しげでもあった。「あの人？」と

いうのはどうやらあの楽天家のご主人の話ではないようだ。

「あの衝撃波を生き延びたのは全人類の3パーセントに満たないと東北のカリスマは言っていました。それにトコログリアの接種を受けていなければ、この氷の世界であなたを探すこともあなたの許へ辿り着くことも不可能だったことでしょう。嘘をついたのではないと思います」

「どこの誰だかわからない」あの人？を僕は何故だか弁護する。

「でも、奇遇よね。その人も小野木さん、あなたと同じ名前だったの。彼があなたを代わりに寄越してくれたんだと思ってあげようかしら。本当に地球最後の日が来るなんて思ってもみなかった。いつも大袈裟なことばかり言う人だったわ」

どこかで聞いたような話だな、いつの時代もそんな男はいるものだと思うていた僕の頭で何かの接点が閉じた。げっ、父さんだ。『俺は奈緒子を愛し過ぎてしまったんだ。だから彼女を失うのが怖くて嘘を塗り重ねていった。結果、奈緒子をひどく傷つけてしまったよ。今もあの三連星を見ると彼女が幸せで居てくれるようにと祈っている』こんな話を6歳の息子にするか？だが父さんはした。僕の目の前で思い出を語る女性は、妻子が居ながらそれを隠して父が9年間も交際を続け、とんでもない別れ方をしたという女性に違いない。僕が石田真由美に訳もなく惹かれてしまった理由にも答えが見つかったように思えた。悲しい答えが――

『将を射んとすれば先ず馬を射よ』この世間話にそんな目論見がなかったとは言い切れない。僕のそんな姑息な思惑は『藪をつついて蛇を出す』結果となってしまった。自分を酷い目に合わせた男の息子に可愛い娘を近付けさすはずはない。しかし黙っている訳にも行かない。話題に乏しいシエルターの中では、いつかバレてしまうことだったのだ。せめて母に知られる前に――と、僕は正直に語ることにした。

「ええと……実は僕の父は15年前に東北で亡くなっているんです」
「まあお気の毒に」

「石田さんの奥さんのお名前は、ひよっとしてナオコさんですか？」

「そうよ、奈良県の奈にへその緒の緒。真由美に訊いたの？」

間違いない、僕は頭を抱えた。

「いえ、父です」

怪訝そうに首を傾げた石田さんの奥さんの目が見開かれる。どうやらお気づきになられちゃったようだ。

「……あなた、ひよっとして淳一の——」

「はい、息子です」

廃棄されたガソリントankの中で眠れるほど腹の座った石田さんの奥さんが喚き出すとは思えなかったが、そう答えた瞬間、僕は目を閉じ首をすくめていた。怒号もビンタも飛んではこない。僕はゆるゆると目を開ける。石田さんの奥さんが僕を見る目は懐かしいものを見るようでもあり感慨深げそうでもあり、とにかくそこに怒りの色がなかったのが意外だった。

「言われてみれば、あの人の面影が——何故、今まで気づかなかったのかしら」

「あの……決して隠していた訳ではなく、僕もついさっき気づいただけで——」

「私が怒りだすとも思った？　あなたもお父さんに似て女心がわかっていないのね」

そう言う石田さんの奥さんは真由美嬢によく似た目を細めた。

僕は理解が及ばず目をしばたかせるばかりだった。

「女は心の中に憎悪と愛情を共存させることが出来るのよ」

その言葉を何度も頭の中で反芻してみた。敢えて説明の必要はないだろう。これを聞いたなら父さんは狂喜したに違いない。

「そうか、やっぱりね。真由美があなたの事を好きになっちゃうはずだわ。親子ねえ……真由美のことをお願いします。あの子は口に出してこそ言わないけど、あなたのことが好きみたい」

そして僕も狂喜した。

「ところであなた独身よね？」

「いえ、結婚して……しました」

「ました？ 離婚でもなさったの？ その若さで？」

「あの9・02で妻と息子は死にました。役場がなくなっちゃったので戸籍はそのままですが、現実には婚姻関係に法的な拘束力はなく、それにこんな状況ですから――」

必死に説明する僕を見て石田さんの奥さんはぷつと吹き出された。「ごめんなさい、痛ましいことなのに笑ったりして。あなたがあまりに杓子定規な物言いをするものだから。事実上、障害はないってことね？ 良かった」

簡単に納得する石田さんの奥さんだった。

「すみません、出来ればこれは母には内密に」

「わかってます。あなたのお母さんとは再婚なのよね？ まったくあのゼウスめ、どれだけ女を泣かせたら気が済むんだろう」

この時石田さんの奥さんが神の名前を口にされたのは、決して威厳を讃えようとしたのではなく単に父さんの女癖の悪さを揶揄したものだっただろう。だが僕は別のことを考えていた。父さんは人のいい所を見い出すことが上手だったとカジさんは言っていた。長所ばかり目についてしまえば、どんな人を好きになってしまうのも無理もないのではなからうか、と。至って都合のいい解釈ではあったが、息子の僕ぐらいは理解してやらないと。勿論、そんなことは石田さんの奥さんにも真由美嬢にも口が避けても言えない。

「仕事に戻ります」

「頑張ってね」

僕は複雑な心境だった。僕の手足、そして課せられた使命。実のところ障害は山ほどあったのだ。

完成―氷のドーム

ドームは完成した。115m×82mのそれは建築の素人集団が作り上げたものとしては立派過ぎる出来栄えだった。正直、ここまでのものが出来上がるとは僕自身思ってもみなかった。衝撃波に備えて垂直部分は一切なくし、柱の一本一本、ルーフィングに用いた氷のブロックの隅々にまでバイオ流体緩衝材が注入されている。薄灯りの中、それは赤く誇らしげに煌めいていた。ゴキブリは赤い光が見えない。ホモローチ対策にも効果を発揮してくれるだろう。

屋根下部分にはコンクリート工場の残骸から拝借してきたアラミドクロスを氷で包み込んで作ったキャットウォークが張り巡らせてある。補強と点検用通路を兼ねたそれが緊急避難にも役立つてくれればいいと思っていた。二重にした外壁の間には人口光合成でハッカやミント等のハーブ類を栽培することにした。これもゴキブリが嫌がる臭いだろうだ。

住民の生活空間をドーム内に移し、地下シェルターを所教授夫妻のラボとして解放することが決まっていた。雄さんと僕、六頭の犬達が迎えに行く予定だった。ルーフィング（屋根部分の工事）にかかる直前、間仕切りを屋根の高さまで伸ばしてストリング（骨格材）にするセミモノコック構造への変更を提案したせいで作業工程が増えてしまっていた。杜都市のドームより良いものを作ろうなどといった伊都淵さんへの対抗意識は既がない。ただただ住民の安全を考えてのことだった。" 万全を期す？僕の頭の中はそれで埋め尽くされていた。寝るか食べるか作業をしている、そんな毎が続いていた。だから残念ながら僕と真由美さんの仲は進展していなかった。『希望を失ってはいけない。なくしたのなら我々で生み出して行くんだ。それが明日への力になる。未来を手繰りよせるのは個々の努力だ』伊都淵さんの言葉は真理だった。僕達はやり遂げたのだ。この全てが氷に覆われてしまった世界で。

作業に当たった人々、食事や怪我の治療など裏方として支えてくれた人々の全員が氷のドームを見上げていた。これが出来るのなら不可能なんてない。くたくたに疲れていたはずのどの顔にも力が漲っているように感じられた。

「さあ、引越しだー」

誠さんの号令で全員がそれぞれの役割へと戻って行く。人間重機の僕にも多くの仕事割り当てられていた。

LPGボンベを両脇に抱えて歩く僕を呼び止めたのは雄さんだった。

「所教授ご夫妻を迎え入れたら次の段階に移るぞ。まずは周辺の生存者探しだ。このドームなら200人は収容可能だ。その後、俺は東を廻って杜都市を目指す。丈は西へ向かうんだ。生存者のコミュニティを見つけたらドームの建造を指導しろ。少数の場合は、どこかに合流させる。人が地下で暮らしているようでは日本の再建は有り得ない。伊都淵さんはそう言っておられた」

「わかりました」

「誠、剛、伊藤君に留守を任せる。俺は榊君と組む。丈は井上君と智君を連れて行くといい」

「井上さんは榊さんと一緒の方が気心も知れていて動きやすいのではないだろうか。僕は智君と二人で大丈夫です」

僕に雄さん程の統率力はないが発見した生存者にパーティーに加わってもらえばいい。ちょうどホモローチの餌食となったアイスギヤングを労働力として役立てようとしたように。何となれば動物だって構わない。伊都淵さんから僕の特異な能力については聞かされていたのだろう。その提案を雄さんは拒まなかった。ただ、この計画は予め伊都淵さんから知らされていたものだ。わざわざ雄さんがそれを持ち出したのは他に話したいことがあるのではないかと考えるのが自然だ。

「これを置いてきます」

ボンベを設置予定だった場所に据えて戻ると、雄さんは緩斜面の

東側——かつてカジさんが住んでいたログハウスのあった場所へと僕を誘った。

「話しておきたいことがある」

案の定、重苦しい表情で雄さんは語り始めた。

「これだ」

雄さんは手袋を脱いで淡いピンク色の右腕を僕に差し出してみせた。

「あの時、この右腕は俺の意識下を抜け出して反応していた。俺は撃つべきかどうか迷っていたんだ」

「でも、敵だと認識したからこそその反応だった訳ですよ？ 誠さんや伊藤さんを射った訳でもないじゃないですか。だったら心配したことはないですよ、所教授は何と言われたんですか？」

「脳以外へのP300A投与は俺だけだから検証例も皆無。注意するしかない、そう言われた」

「だったら僕の手足だって——」

そう言いかけた僕はホモロチと闘った時のことを思い出した。口の中に悔恨が苦味となって広がる。僕の四肢は意識下で彼等の体を切り裂いていたのだ。雄さんが語る状況とは違っている。

「覚えていて欲しい。俺の腕が誤ったターゲットに狙いを定めた時、それを止めることが出来るのは丈、お前だけだ」

僕は雄さんの言葉の意味を考え、そして狼狽した。

「雄さんの行いが間違っていたことなんか僕の知る限り一度だってありません。そんな事態になったとすれば、それは正しい判断なんです。恐らく僕なんかでは理解の出来ない——」

「俺が誠や剛にクロスボウを向けてもそう言い切れるか？」

強い口調になった雄さんに僕は言葉を失う。そんな事態が起こったら——僕はやはりどうしたらいいかわからないだろう。この世界では一瞬の迷いが誰かの命を危険にさらすことになるのだ。

「まあいい、そんな状況になれば俺自身でこの腕を切り落とす。だが、もしそれが間に合わなかった場合、お前に頼んでおきたかった

んだ。明日は井之口市へ行くぞ。充分に休んでおけよ」

「……はい」

僕はそう答えるのが精一杯だった。

「これ……あなた達が作ったの？」

梓先生は氷のドームを見上げて大きく目を見張られていた。

「ええ、でも設計も工法も伊都淵さんのアイデアです。僕達はその通りに作業を進めただけです」

「それでも凄いな、これは。いや、君を見直したよ」

所教授もそのまま後ろに倒れてしまうのではないかと思うほど体をのけ反らせて赤く煌めくドームを見上げる。雄さんの言葉が気になっていた僕でなければ調子に乗ってセミモノコック構造への変更を自慢気に垂れ流していたことだろう。

「地下シェルターへご案内します」

雄さんに促され、教授ご夫妻は階段を下りてゆく。僕は荷物を解きにかかった。

「手伝うわ」

振り返るまでもない。僕の胸を高鳴らすのは石田真由美の涼やかな声しかないからだ。それはニットキャップを深く被り、顔をマフラーで覆っていても聞き違えることはない。僕の方に歩み寄ってくる彼女は氷点下の世界で腕まくりをしようとしていた。

「大丈夫です、それにこれは重いから華奢な真由美さんには持てませんよ」

勝手に赤らんでしまう頬をみられたくなかった僕は俯き加減で返す。

「あら、あたし案外力持ちなのよ」

そうは言っても一番軽い機器で数十kgはあるのだ。とても女性の細腕で持ち上げられるとは思えなかった。彼女が怪我をすることは勿論、落として衝撃を与えた機械が壊れてしまう不安もある。僕が止める前にLD100という骨密度測定器に手をかけた彼女だった。

た。せえの、の掛け声で踏ん張ろうと力を込めた足が氷で滑る。僕は仰向けざまに倒れかけた彼女に駆け寄って抱きとめた。

「怪我をしますから」

僕と真由美さんの顔は20cm程まで近づいていた。彼女は顔に巻いたマフラーを掴んでずり下げる。その唇はきつく結ばれていた。「今度出かけたらあなたは当分帰ってこれないんでしょう？」

「ええ。どれだけの生存者が居て、そのうちの何パーセントがトコログリアの接種を受けているかわからない。搜索は一刻を争う。伊都淵さん——東北のカリスマからそう言われてます」

「邪魔にならないようにするから、あたしも連れていって」

思いつめた表情で語る彼女だった。機材運びを手伝おうとしてくれたのは、自分が重荷にならないことを証明したかったのだろう。三つ歳上の真由美さんを健気というのも変かも知れないが、僕の胸に染み入ってきたのは正にそんな感覚だった。生存者を見つけ出して連れ帰るだけの旅であれば、一も二もなく受け入れていたはずだ。彼女の申し出はそれほど心躍らせるものだった。だが……

「無茶を言わないで下さい。どんな危険が待っているかわからない旅なんです」

「そんなに危険なら、あなたが帰ってこれないことだってあるんじゃない？」

真由美さんの唇が小さく震え出した。この時の僕の呻吟が理解できらるだろうか。恋心を抱いた相手から熱烈な告白を受け、それでも期待に応えることは出来ない。使命があり、四肢は作り物。そんな僕は彼女への想いをプラトニックのまま終わらせるつもりでいた。

「ええ、ですから尚更真由美さんを連れてゆく訳には行かないんです。伊都淵さんは言いました。人類の殆どが死んでしまった今、未来を託せるのは子供達なんだ、と。我々男に子供を産むことは出来ません。だから……」

わかってもらえるだろうか、愛する女性に他の男の子供を産んでくれという辛さが。

「さっきから伊都渕さん伊都渕さんって、あなたの考えはないの？」
あります、僕は真由美さんが好きです。使命さえなければここに
残ってあなたと……僕がそれを口に出来ないでいると彼女は身を翻
した。その瞳に浮かんでいた涙の粒が花弁に滴る朝露のようにキラ
リと光って落ちた。

P300Aの量を増やしてもらおう。今の僕に必要なのは、恋す
る女性の思いを受け入れられずめそめそする感傷でもなければホモ
ローチを殺してくよくよ悩む弱さでもない。雄さんのように使命第
一に徹することの出来る強さだった。

タイタニック

引越しが終わって全員でテーブルを囲んだ夕食の間も、真由美さんはずっと硬い表情のまま僕を見ようとはしなかった。定位置と言ってしまうばそれまでだが、彼女と僕の席は遠く、そして今はそれ以上の距離を感じていた。

P300Aの追加投与は拒絶された。あの伊都淵さんだってすぐに成長した訳ではないといった理由で。しかし当時と今とでは状況が違う。僕の弱さや迷いが救える命も救えなくしてしまうんです。そう懇願してみたが「君の人格を変えてしまうようなことは出来ない」と所教授の首が縦に振られることはなかった。梓先生も黙って首を振るだけだった。僕は陰鬱な気持ちでドームを出ていった。結果をもたらしえない能力に何の意味があるだろう。知識が増えその使い方を覚えても、感情を統率する人間性が劣っているのは力も張子の虎に成り果てる。こんな矮小な男を人類の希望として選んだことは伊都淵さんらしからぬ判断ミスだったのではないかと僕は考えていた。少なくとも僕が自分に投資をしていたなら、その額を五分の一にまで減らしていたことだろう。女々しい人間重機の繰言は、誠さんが見つけてきた本物の重機の中で涙と共に流れ出していた。僕を取り囲んでいた空気が甘く芳しく感じられて顔を上げると。重機の運転席から見下ろす場所に真由美さんが立っていた。

「今、いい？」

僕は必死に涙を拭ったが、撥水加工の施されたウールが水分を吸い取るはずもない。

「ええ……」

いくらトコログリア接種済みとは言え、氷点下の屋外に立っていて辛いはずはない。しばれかけたドアを開け真由美さんに手を伸ばす。その手を掴んだ彼女はよいしょっと言ってキャタピラに乗り、そして狭いキャノピー（運転席）に入ってきた。僕はオペレー

ター用シートを譲る。

「さつきはごめんなさい。つい感情的になっちゃって」

「……いえ」

真由美さんの話がどう続いてゆくのかはわからない。彼女の頭の中を探りたくて仕方ない僕がその誘惑に打ち勝つにはかなりの努力が必要だった。

「待っててあげる」

僕が何か話し出すのを待ってくれるのか？ 脳波を読まなければ、そんなトンチンカンな誤解さえ二十三歳の若者はしてしまうものだ。僕は謝罪した。

「申し訳ありません」

分厚い手袋をはめた手でニットキャップを被った頭を掻く。隔靴搔痒ではないが、していることそのものが無意味ではある。

「何故、あやまるの？ 帰ってこないつもり？」

え？ どうやら僕は感違いしていたようだ。真由美さんは僕が戻るのを待っててあげると言いたかったのだ。僕は壊れた扇風機の如く首を振った。

「いえ、帰ってきます。ここには母もいますし……でも、それがいつになるのか——」

内気な僕は「真由美さんが居るから」とは言えなかった。恋心というものは妻子が居て同僚の女性を食事に誘うような不真面目な男さえ純真な少年に変えてしまうものなのだろう。昼間したように真由美さんが顔を覆うマフラーを下げて言った。少しだけ不安気な表情にも見える。

「何年も帰ってこれないなんて言わないわよね？」

僕は予想される生存者数と、ドーム建造に要する期間を素早く計算した。伊都淵さんの計算通りなら一千二百万人——つまり東京都の人口が生き残っているはずなのだが、今までに救出なった人々の割合を考えると、かなり下方修正せねばならないと考えていた。バイオ流体緩衝材の培養から教え始め、ここと同じ規模のドームを7

00〜800程作り上げる。基礎工事が始まった時点で次に移るとして――

「一年から一年半ぐらいでしようか」

真由美さんがにっこりと笑った。

「待っててあげる」

ホモローチ惨殺の記憶が消えた訳ではない。雄さんの発言も気になっていった。僕にこんな重い使命を課した伊都淵さんを恨めしくも思っていた。だが――

白夜だったので「周囲がパツと明るくなったように感じた」とは言えないが、感覚的にはそれに勝るとも劣らないものがあつた。僕の憂鬱は自分自身を騙し切れないところに根ざしていたのだ。手袋を脱ぎ捨てて淡いピンク色の肌を露出させる。

「僕の手と足は作り物なんです」

「わかってる、あなたのお母さんに聞いたわ。だからこそあたし達を助けることが出来たんでしょう？」

「気持ち悪いとか思いませんか？」

「全然思わない」

この期に及んで何を迷うことがあろう。二人の吐息で曇るユニボのキャノピーの中、僕は真由美さんをふんわりと、それこそ壊れ物を扱うかのように抱きしめた。彼女の唇は温かかった。恐らく悲嘆にくれていた僕が体温調整を忘れていたせいだろう。キーを捻るとユニボのエンジンが始動する。その音で誰かがドームから出てくるかも知れないとは思ったが、僕達の激情を止められるものは最早何もなかった。

狭いキャノピーの中で、僕と真由美さんは結ばれた。何度目かの愛を交わし終えた時、ガラスに付いた真由美さんの手の跡がとても印象に残った。――タイタニックだ――その記憶は僕自身のものではなかった。伊都淵さんのものか、それとも父のものなのか、何であろうと構わない。僕は果たすべき責任が増えたことが嬉しかった。

「見つかったか？」

雄さんと僕はドームを中心に30km圏内の搜索を終えて戻っていた。雄さんの櫓にはどこからか集めてきた食料品のダンボール箱が乗っているだけで僕のホバーも同様、LPGボンベと誠さんに頼まれたガラクタのみが荷物の全てで、生存者はおるか動物の一体も見つけられずに居た。本当に2、3パーセントの生存者が居るのだろうか。シェルターらしきものを数件見つけたが中に人の気配はなく、これを100km圏に延ばしたところで大した成果はないように感じられていた。僕は力なく頭を振る。

「そうか、市庁舎の地下も避難物資だけが残されていて人の気配はなかった。あの衝撃波では地下に潜る時間さえなかったのかも知れないな。明日は100km圏まで伸ばしてみよう。誠の作った短波無線機の通信範囲はせいぜい50kmだ、危険は伴うが仕方あるまい」

「見つかるでしょうか」

「見つかるんだよ、何としても」

それが終わればいよいよ僕達は旅立つことになる。留守を守る人の数を、出来れば男性の頭数を増やしておきたいと思っていたのは雄さんも同じだったようだ。

おそらく外気温は氷点下30℃を下回っていただろう。ホモローチの死骸は腐敗が進むのも遅く、大掛かりな搜索に出る前に水中行軍に慣れてもらおうと連れ出した智君に大きなショックを与えていた。改めてホモローチを観察すると三分の一程が女性？ 雌？ つまり胸に膨らみがあった。荷物は僕が下ろしておくからと言うと、彼は青い顔をしてドームに入って行った。明日こそ――たったひとりでもいい。生存者を見つかりますように。僕はよく晴れ上がった空を見上げた。

一時間進んでは視覚と聴覚を解放する。らしい動きがあれば半径5km圏内ならどちらかのアンテナに引っ掛かるはずだ。しかし何

も動きはない。そして僕達が今日の搜索に出かける前、智君が雄さんに話しているのを訊いた——小野木さんは真剣に探しているようには見えないんですが——常人から見ればそうかも知れない。雄さんは「丈は、あれで必死に探しているんだ」と答えてくれていた。目を凝らし耳を澄ませると、集中のため僕は黙り込んでしまう。そんな僕に不安を抱いた智君はパーティーを組む相手を入れ替えて欲しかったのかも知れない。

四時間が経過し、搜索範囲を広げても生存者を見つけることは出来なかった。氷のオブジェを掘り起こせば何かしら出てくるものがあるのだが、それが生存者である可能性はゼロに等しい。家族らしい四人が体を寄せて凍りついていたのを見たとき、智君は朝食を全部もどしていた。彼はかなり疲れているようだった。前を行く僕との距離が開きつつある。帰りはホバーに乗せて行ってやるか、そう思って再び視覚と聴覚を搜索モードに戻した時、地響きと共に凄い勢いで前方から迫ってくるものをみとめた。

「猪だっ！ デカイぞ。逃げろっ」

氷の平原に身を隠す場所などない。話しかけてみるか？ いや、そんな余裕はなさそうだ。高校柔道部の主将としてインターハイに出たという智君だったが、185cmの体を凍りつかせたように立ち尽くしている。猪の鼻息は荒く凶悪そうな牙を振りかざしながらの突進だった。選択の余地はない。僕は智くんを突き飛ばしておいて黒い弾丸にタイミングを合わせた。数歩助走して猪を飛び越える。跳び箱の要領だ。目標物を見失った猪は数十メートル駆け抜けてからヒヅメで氷を蹴立てて四輪——いや四足だな、とにかくドリフト気味にUターンしてくる。今度はホバーにもたれかかったままの智くんを狙いを定めて。

殺るしかないか——僕は全速力で駆け出した。ええと……猪の急所は耳の後ろか心臓か。なにに、肋骨の三番目と四番目の間を……って、そんなの探してる暇はない。あの厚い皮脂を見る限りスラッグショットでも命中しなければ突進は止まないだろう。瞬時に猪

に駆け寄った僕は首筋めがけて手刀を叩き込む。何か硬い物が陥没するような感触があった。猪はそのままたよたと二、三步進むと、どうと横倒しに倒れた。その音で顔を覆っていた両手を開くと、智君が震える声で言った。

「小野木さん……格闘技でもやってたんですか？」

倒れた猪は100kgは優にありそうなガタイをしている。それが時速50kmで突進してきたら大抵の格闘家も逃げ出していただろう。泡を吹いていた口からはみ出した牙も15cmはある。僕だって出来れば逃げたかったのだが、そうすれば智君とホバーを見捨てることになる。猪には可哀想だが、こうするしかなかったのだ。我々の血となり肉となってもらうことで成仏してもらおう。確かポタン鍋にするには臭み抜きのため、血抜きをする必要があるはずだ、と猪の後ろ足を持ち上げて気づく。分銅のような物が通されたものが通されたロープが巻きついていた。

「何だろう？」

原田兄弟

「生存者だっ！」

猪が走ってきた方向から近づいてくるものがある。未だ恐怖から立ち直れてない智君が僕の指し示す方にのろのろと顔を向ける。人影が二つ、台地を滑るような速度だった。ウィンドサーフィンのボードのようにも見える。僕達の数メートル手前、派手なアクションで止まると、開口一番こう言った。

「あっちゃあ、先を越されちゃったかあ」

「ほら見ろ、風真^{ふうま}の狙いが悪いから上手く両足に巻きついてくれなかったんだ」

片方が猪の後ろ足を指差して言った。

「お前の方が肩がいいから投げろって言ったのは兄ちゃんじゃないか」

「狙って投げろって言ったろう？ 肩はよくても頭が悪いんじゃない、どうしようもねえな」

「よく言うよ。俺は兄ちゃんみたいにテストで0点とったことは一回もないかなら」

驚いたことに彼等は僕達が目に入らないかのように言い合いを始めた。話を聞く限りこの二人は兄弟のようで体格からしてもまだ高校生ぐらいだろう。重りのついたロープを投げて猪が足を取られて転倒したところを何とかしようとしていたらしい。随分と時代遅れな狩猟方法を思いついたものだ。そして彼等にとって生存者は珍しい存在でもないようだった。僕は期待をもって問い掛ける。

「君達はどこから来たんだい？」

「てゆうか、あんた誰？」

兄ちゃんと呼ばれていた方がぶっきらぼうな口調で聞き返してきた。

「僕は小野木丈、そちらが木下智君。生存者を探している。コミュニ

ニティがあるんだ。住む場所も食料も、電気もあるぞ」

「そんなのうちにだってあるさあ」

「黙れっ！」

兄の叱責に弟が首をすくめる。それはこの地方の方言だった。語尾の「あ」が持ち上がるが疑問形ではない。他のコミユニティの住人だということか。僕の期待は膨らんだ。

視覚を解放して彼等の虹彩を調べる。しかしレントゲンの用に瞼を透かして見える訳ではない。ゴーグル越しに覗く二人の目はとても細く、かろうじて青紫に変色した虹彩が見て取れた。

「どこに住んでいるのか教えてくれないか？ 君達の他に生存者は？ トコログリアもある、未接種の人はいないか？」

二人の青年は僕らから少し離れると額を寄せ合って内緒話を始めた。しかし数km先の物音を聞き取る僕にとって数メートル先の会話を聞くぐらい何でもない。

（どうする？ 父ちゃんは誰にも教えるなって言ってただろ）

（うん、悪い奴等だったら病院を乗っ取られちゃう可能性もあるもんな）

（でも、鍾乳洞に避難してる人達は、殆どなんとかグリアを受けてない人達だったんじゃないか？ あの人達を助けてあげられるかもよ）

病院？ 地下の機械室にでも住んでいるのだろうか。しかもトコログリア未接種の生存者が居るのだとも二人は言っている。会話そのものは僕達を案内することに積極的ではなさそうだ。僕はこんな提案を試してみる。

「この猪はやろう。運んでやってもいい」

二人の目の色が変わった。

（父ちゃんに相談してみろよ）

（よっしゃ、わかった）

兄の方が短波無線機を取り出す。僕達も持っていた手製のものではなく市販品だった。

（うん、薬は要るんだな？ わかった。ひとりで？ ああ、そうゆ
つてみる）

無線の向こう側では父親らしき人物が指示を出していた。この世
界で生き延びていたのだから、それなりの用心深さはあるようだ。
通話を終えた兄弟は再び内緒話に戻る。

（何て言ってた？）

（薬は必要だからひとりだけ連れて来いって。それがダメなら猪と
何かを交換する気はないか訊ねてみるってさ。念の為、あの化物を
捕まえた罫を仕掛けておくって）

（そっか、だったら安心だな）

兄の方が近づいてきて言った。

「ひとりで来れるか？」

「ああ、それが条件ならそうしよう」

智君に短波無線機を渡して先に帰るようにと告げる。それは智君に
とっても渡りに船だったようで、彼は僕が出発するのも待たずに来
た道を引き返して行った。

僕はホバーからローラーブレードを出した。兄弟のサーフボードに
はホイールが付いており、彼等が来た方向へ向かうとなれば追い風
でかなりの速度が出せそうに思えた。トコログリア未接種の人が居
るとすればのんびりしてはいられない。猪を背負った僕を見た時、
兄弟はぎょっとした顔になった。

「ここから20km程先だ。ついてきてくれ」

「こっちは自己紹介したんだぜ。君の名前も教えてくれよ」

「海地^{かいち}だ、原田海地。こいつは弟の風真」

「海地君に風真君か——二人共、勇ましい名前だな」

海地の細い目が笑ったように見えた。

「ちゃんについてこいよ。はぐれても探しに戻ってやんないからな」
振り向いて言った風真を追い越してゆく。ホバーが巻き起こす風
に煽られて体勢を崩しながらも転倒は免れたようだ。意地になって
僕を抜き返して行った。

「なあ、兄ちゃん、あいつ力ありそうだぜ。あんなでっかい猪を担いじゃうくらいだもん」

「猪も餌がなくなつて痩せちゃってるんじゃないか？ 見た目程重くないのさあ」

「そうかなあ」

「心配するなって、ちょっとぐらい力が強くたってこっちは三人なんだぞ。あんな奴に負ける訳ないじゃん」

先を行く原田兄弟の会話は丸聞こえだったが、知らんふりで後に続く。背負った猪の臭いが堪らない。僕は嗅覚の伝達を弛めた。バイオナビが正確なら、温泉で有名な或る街近辺を走っているはずだ。伊都淵さんに詰め込まれた地図を頭の中に展開してみる。市立病院を県立病院のそれぞれの位置が投影される。地下に機械室を持つほどの規模なら民間ではないだろうと予測していた。そして原田兄弟は市立病院の方に向かっていているようだった。

ここだな——おそらく発電機の音だろう。微かではあるが唸り音が聞こえる。電位にも大きな変化があった。上手く氷でカモフラージュしてあるが、僕の目は誤魔化せない。何よりぱっくり頭の割れたホモローチの死骸が、ここら一帯を取り囲んで餌の在処を知らせていた。僕は素知らぬ顔で通り過ぎようとする兄弟に呼びかけた。どうやら罠はもう少し先にあるらしい。仕掛けてあるとすれば落とし穴かむそう網だろう。

「おーい、どこまで行くんだ？ 入り口はここなんだろう」

「ちっ、違うさあ」

二人の細い目は正直だ。これ以上ないほど泳ぎ彷徨っていた。

「初対面で信じろつてのも無理な話だけど、僕は悪さをするつもりはない。ほら、約束通りこれは君達にやろう」

放り出した猪に近づく訳でもなく、兄弟は立ち尽くしている。海地は地下の父親にでも合図を送っているのだろう。さっきからボードの端で氷を叩いていた。僕の見下ろしている部分、氷の扉がゆっ

くりと持ち上がった男が顔を出した。

「こっちの負けだな。入ってくれろ」

言葉に方言が混じるところをみるとそう若くもないようだ。

「ありがとうございます。ですがそれはまた後ほど。猪は置いてゆきますので好きになさって下さい。トコログリア未接種の人が居ると聞きました。どなたか処置出来る方はいませんか？ もしこちらで処置が出来なければ我々のコミュニティに連れて帰ります。案内して下さい」

「もう下と呼んであるろ。ここにも処置の出来る人間はおる」

顎をしゃくる男の後に続いて階段を下って行く。そこは予想通り病院の機械室だった。五人の男女がストレッチャーに横たえられていた。

「息子さん達の話では、もっと多くの生存者が居たように感じたのですが」

男は兄弟に咎めるような目を向けてから言った。

「鍾乳洞に10人、市庁舎の地下に14人おったんだがな、凍死するかあの化物どもに喰われちゃって、迎えに行った時にはこれだけしか残つたらなんだ。おい、出てきてもいいぞ」

男の声で機械の影から中年の女性が姿を現した。

「妻のかおりだ。看護学校で講師をしてた。薬をもらおうか」

僕は猪の臭いが染み付いたリュックを下ろし、トコログリアとカテーテルを取り出す。男の妻が手早く処置にかかった。男が顔を覆っていた布切れを外す。頬には大きな傷跡があった。

「むそう網でとっ捕まえたのが死んだふりをしてやがってな。そんな時に引っ搔かれたんだ」

僕の目線に気づいた男はそう説明してくれた。

「そうでしたか……」

「コミュニティがあるってか？ 発電機の燃料も食い物もそろそろ底を突く。ここに居る全員を引き取ってもらえるなら移ってもええよ」

「是非、いらして下さい。息子さん達のボードを改造されたのはご主人ですよ。今はそういった能力をお持ちの方が貴重なんです」

「化物はみんな死んだのか？」

「ええ、第一世代は」

僕のその答えは伊都淵さんを真似たものだった。あれで終わってくればいいと願ってはいたが、反面あれで終わりにはならないだろうとも思っていた。

出発前夜

所教授と梓先生、原田さんの奥さんにスーザンも加わって必死に手は尽くしてくれたのだが、五十代のご夫婦と六十代の男性の3名が命を落とされることとなった。トコログリアなしで鍾乳洞に避難し、ホモローチの襲撃にも耐えて命を長らえた方々の逝去はドーム全体に落胆を運んできた。結局、僕が探し出すことが出来た生存者は8名、そして隣県まで足を伸ばして搜索に当たった雄さん達のパーティーが連れ帰った家族が3名。後顧の憂いがなくなった訳ではないが、旅立ちの時は迫っていた。

智君は遠征のメンバーから外した。ルールに守られた中での闘いならそれなりに力も発揮出来たのだろう。だが、この世紀末のような世界では多少のルール破りに目を瞑ってでも臨機応変に対応を変えられる柔軟性が求められる。彼自身、それを身に染みて理解していたようだ。ドームに残って守りを固めてくれと言った僕の提案を素直に受け入れてくれた。代わって僕のパーティーに加わったのは海地・風真の原田兄弟だ。十八歳と十六歳の彼等は早くから外の世界に慣れていたし、狩りをするほどの順応性を見せていた。風向き次第ではあるが、彼等にはサーフボードといった移動手段もある。僕のローラーブレードについてこられることも彼等を選んだ理由のひとつだった。

「これを持って行ってくれないか」

夕食後、誠さんから渡されたのは大きな蛸刀みたいなものだった。「タケ坊が持ってきてくれた車のリーフスプリングを削って作ったんだ。ホモローチ以外にも敵は居るかも知れない。飛び道具のある雄はともかく、お前は何も持っていないからな。俺を安心させるためと思って持って行ってくれ」

鈍く輝く分厚い刀身は氷柱でも切り裂けそうだった。手渡されたそれはズシリと重みを感じる。3kgはあるだろう。滑り止めを施さ

れた柄まで着けられている。短いスプリングから作った軽い——それでも1・5kgはある——方を原田兄弟にひと振りずつ渡す。彼等はさかんに素振りを繰り返している。

「これが鞘だ。刃は鋭いから自分の体を切らないように注意してくれ」

手縫いで作られたような革製のそれをリュックのストラップに取り付け、背中に交差させる形で差し込んでみる。映画バイオハザードのアリスになったような気分だった。

「かっこいいじゃん、タケ坊」

風真が調子に乗って言った。

「小野木さんって呼ばないとお前を刀の露に変えてやる」

「へ？ 何それ？」

あれ、違ったつけ？ テレビの時代劇でそんなことを言っていたような記憶があるのだが——この年頃の少年は時代劇など観ないのだろうか。面倒になったので僕は説明を放り出す。

「いいや、もう。好きに呼べ」

かくして、僕は高校生にタケ坊と呼ばれることとなる。離れて見ていた真由美さんも笑っていた。

「こんなの振り回すには相当な体力が必要になるな。筋トレでもするか」

「毎日、ホバーを引かせてやるよ。筋力もつくだろうさ」

「冗談！ 俺は馬車馬じゃないっつーの」

努めて明るく振舞う海地の言葉には、明日からの長旅を大したことではないと自分に言い聞かせているような響きがあった。長くて一年半——真由美さんにもそう伝えてはいたが、この二日間の生存者探しが未来に暗い翳を落としていた。果たして僕達はどれだけの人を発見し、幾つのドーム建造に関われるのだろうか。それは雄さん達のパーティーも同様だったようで、意識して明るい口調で話していた榊さんと井上さんが印象的だった。

「ありがとうございます。出来ればこれを使うことなく帰ってきた

いと思います」

僕は誠さんに礼を述べ、荷物の積み忘れがないかを確かめるためにドームを出た。

アニメでクローンが入っているようなガラスチューブが必要な訳ではない。バイオ流体緩衝材の初代は鮮魚加工所から借りた桶で培養されていたそうだ。トラックの荷台があればなんとかなる。水を切断するための道具も埋もれた廃墟を探せば見つかるはずだ。しかし必ず発見出来る保証がないのが生存者と、彼等の気概だった。知己の多かったここは僕や雄さんのする事を信じてくれる人達ばかりだったが、シエルターを奪ったような連中が居ないとも言えない。例えば善良な生存者が見つかったところで、世間から見れば僕は若造で、パーティーを組む原田兄弟は平時なら高校生なのだ。僕達の話に耳を傾けてくれるだろうかといった不安もあった。険しい岸壁の前にアプローチを躊躇する登山者の気分だった。

「下手の考え休むに似たり」

突然の声に僕が振り向くと、そこには梓先生が立っていた。

「旅の成功を案じているんでしょう。そんなもの始まってみなければわからないじゃない。ひとりの生存者も見つけられずに戻ってこなきゃならないことだってあるかも知れないけど、それはそれで仕方ないことよ。出掛ける前からうじうじ悩まないの」

「僕の考えていることがわかるんですか？ ひょっとして梓先生も

――」

「だったら患者の治療に役立てることが出来て助かるんだけど、残念ながらわたしに人の考えは読めないわ。あなたのわかりやすい表情から想像しただけ。こう考えてごらんさい。あなたに出来ないなら、それは誰にも出来ない事なの。だからあなたの失敗を責める人は誰も居やしない。あなたが必要だと思えば他人の意志もねじ曲げてでも目的を遂行なさい。それで事を成せるなら、最後には誰もがあなたに感謝するはずよ」

教師だった僕だが、こうして理路整然と――それこそ一分の隙もな

く解いて訊かせてくれる梓先生を見て、僕なんかより余程人に教えるのが上手いと感心し、同時に納得させられてもいた。行き詰まったらそれから考えればいい、一度にあれもこれもと考えてみたところでその通りに物事が進むはずなんかないのだから。僕はこんなに多くの人に支えられているんだ。彼等の期待に応えようとするのではなく、彼等の代弁者として働こう。民の代表者たる政治家の在るべき姿が見えたように思えた。彼等が本来の使命を忘れず権力に執着することがなければ、この国もこうはなってなかったのではないだろうか。

「シエルターに行きなさい。待ってる人が居るわ」

「もう大丈夫です。教授にもそうお伝え下さい」

「いいから、行きなさい。餞別を用意してあるんだから」

有無を言わせぬ口調で梓先生は言った。餞別？ 所教授の訓話を聞かされるのではないのか、と僕は思っていた。暖房の利いた地下に降りて行く僕を出迎えてくれたのは真由美さんだった。いやはや、こんな嬉しい餞別はない。僕達は言葉を交わす時間を惜しむように唇を重ね合い、服を脱ぐ間も待たずに愛し合った。

「もうだめ……子宮がだるくなっちゃった」

真由美さんの言葉に、僕の腰も限界に近づいていたことに気づく。それでも僕達は体を離さなかった。二人の間に髪の毛と筋の隙間があるのも我慢ならないかのように体を密着させていた。やがて真由美さんは上体を起こすと、僕の手をお腹に押し当てて言った。

「必ず帰ってきてね、この子のためにも」

「え？ そんなに早くわかるもんなんですか？」

彼女はにっこり笑って首を振る。

「あたしにはわかるの。ここにはあなたの分身がいる。そしてあたしを守ってくれるって」

この国がこうなってしまう以前、僕の携帯電話に『今日は危険日です』とメールを送ってくるサイトがあった。誰が僕のアドレスを

教えたのかは知らないが、それが届くたび、ハイハイといって削除していたものだ。僕は危険日という呼称が好きにはなれなかった。

「戻ってきます、必ず」

妻にも感じたことのない気持ちを真由美さんに抱いていた。

「どこかであたしよりきれいな人を見つけても帰ってくるって約束出来る？」

「出来ます」

父さんは真由美さんのお母さんに僕はその娘に恋をしたのだから、これこそ？遺伝子が求め合う恋愛？に違いない。僕はきっぱり言い切ることが出来た。

廃墟

誠さんの作ってくれた衛星電話は素晴らしい物で、出力も充分だったのだが携帯するには大き過ぎた。消費電力も多く、悪天候が続けば僕の分の電力まで消費してしまいかねない。所教授に渡してあったものを僕が持ち、それは基地局としてドームに置いておくことにした。誠さんは少し不満そうだった。

喜ぶべきことがあった。雄さんとの橋渡しを頼んでいるうちに心が知れたのだろう。スーザンと誠さんの仲が急接近していたのだ。年下の僕が心配するのもどうかとは思うが、女性にあまり縁のなさそうだった誠さんに訪れた春をみんなが祝福しているようだった。

昨夜、梓先生がラボを明け渡してくれたのは、僕と真由美さんに温かい空間を提供してくれたのと同時に、ユニボに居た誠さんとスーザンへの配慮でもあったようだ。手先の器用な誠さんのことだ。近い将来、カップル用に氷のラボを建造して行く計画もあったのだろう。整地されていないドーム反対側を見る誠さんのホンワカとした目がそう語っていた。

母さんが作ってくれたオニギリを受け取る。「ぼ、ぼくの大好物なんだな」そう言ってふざけようとしたのだが、母さんの目からぼろぼろこぼれ落ちる涙を見て諦めた。

原田さんご夫婦も海地・風真の兄弟と別れを惜しんでいた。兄弟の細い目は父親似だったようで「その目で見る景色は全てパノラマになるんじゃないのか」と冗談を思いついたのだが、その気配を察したのは母さんだ。彼等に近づこうとする僕に立ち塞がり、教務主任に戻った厳しい目線で発言を思いとどまらせた。泣いたり怒ったり忙しい母さんだった。

そして出発の時は来た。僕達の門出を祝うかのように外は快晴――のほろが猛吹雪であった。短波無線機を雄さん達のパーティーに渡した時、原田兄弟は「タケ坊とはぐれたらどうするん？」と訊ね

てきたが「大声で呼んでくれれば駆けつけるさあ」と彼等の方言を真似て答える僕に「そんならいつか」と簡単に納得した。僕的能力については道中にでも伝えておこうと思っていた。冬山登山の経験はないが、ああいったパーティーもそれぞれが能力を理解し合っているからこそザイルに命をあずけることが出来るのだろう。どんな危険が待っているかわからない旅に出掛ける僕達も同様であった。「きっと泣いちゃうから見送らない」と言っていた真由美さんだったが、ドームの柱から半分だけ体を出して肩の高さに上げた手を振ってくれていた。

「よし、行こう」

雄さんのパーティーより早く僕達は緩斜面を駆け下りる。かつて日本最大の湖があった場所が今日の目標地点だった。

ドームに重機を引っ張り上げる姿も見えていなければ、僕に関しての取説がある訳でもない。大袈裟ではなくこれから生死を共にする僕達だった。走り始めてすぐに彼等の意識に呼びかける。《ヤッホー》

「何か、いった？」

「いや、何も」

「何だよ、はっきり言えよ」

「俺は何も言ってるねえってば」

そして二人は僕を振り返る。

「今のタケ坊がやったん？ すっげえ、超能力者みたいじゃん。念力で何か持ち上げたりも出来るんか？」

未知の力に怯えるどころか、彼等は単純に感嘆し賞賛する。

「念力ってんじゃないけど、これはどうだ」

僕は彼等のボードを両手で掴んで持ち上げた。転がり落ちかけた二人は慌ててマストにしがみつく。

「びっくりしたあ、落っこちるとこだったじゃん。持ち上げるなら持ち上げるって言ってくれよ」

常識に凝り固まった大人ではこうは行かないだろう。僕は彼等を

パーティーの仲間を選んだのが正しかったことを確信した。

「僕が速度を落としたら搜索を始めたと思ってくれ。電位の変化、物音、僅かな動きでも見逃さないようにする。手分けして搜索しなきゃならない状況では無線の通信範囲から決して外れないこと。ご両親は君達の無事を願っているんだからな」

「了解っ！」

返事は軽いが彼等なりに緊張感と使命感は持っていてくれる。兄弟に細い目には決意の光があった。視程を伸ばすと近隣にピントが合わなくなる旨を伝え、彼等にはホモローチの死骸が密集している場所を探すように指示する。

「茶色い塊を探せばいいんだろう？ 任せとけって」

離れて見る常人の視野には、異形の残骸もチョコフレークの塊かナッツ入りチョコの様に映ったようで、見つけたものが複数だった場合、兄弟は●永とか■スコとか呼び合っていた。

杜都市を往復した時の様に高速道路しか走らない訳には行かない。氷に覆われてはいても土地勘のある地域でもない場所を搜索するのだ。クレバスもあれば氷河だってあるだろう。視界に地図を投影しながら川や湖の跡に注意して進行する。パーティーの安全を守ることも僕に課せられた重大な使命であった。

勤めていた小学校のあった井之口市にはいった。体温調整の可能な僕達でも屋外で長時間を過ごすにはエネルギーの補給が必要となる。氷を砕いて食料を探し出すのが常人に不可能である以上、生き延びた人々が居るとすれば、その状況は限られる。箱物の公共施設か大病院くらいにしかそんな設備はないからだ。周辺にはやはり頭部の割れたホモローチの死骸がたくさん転がっており、地図を投影するまでもなく場所の特定が可能だった。聴覚を解放すると幾つかの氷解から動きを止めていない時計の音が聞こえてくる。彼等の死が9・02の衝撃波に拠るものか、それ以降なのかまではわからない。

僕達は市の庁舎があった場所に来ていた。氷を叩き割って地下へ

の通路を見つける。誠さんがくれた蛮刀が役に立つ。海地が先頭に立って階段を下りていった。

「こんな所があったんだ……中ノ原市の庁舎にもあったのかな？」

「ああ、雄さんが見つけたそうだ。ただ中には誰も居なかったみたいだけだな」

「こういうのって市民に公開されてるん？」

風真が訊ねる。

「ホームページに？重要な施策・事案？ってタブはあったけど、地下シェルターの所在についてはなかったように思う」

「じゃあ、万が一の時は自分達だけ助かるうとしてたんじゃないのか？ 狡い連中だな」

「あはは、そうかもな」

僕は奥へと足を踏み入れた。手つかずの食料やポータブルコンロ等が堆く積み上げられ放置されたままになっている。防災グッズと書かれたダンボール箱を開けると白いバッグが入っていた。手回し充電式のライトには今や何の約にも立たなくなった携帯電話の充電ソケットまでが入っていた。

「誰か居ませんかー、助けに来ましたー」

風真の声がシェルターのコンクリートの壁に響く。兄弟をドームに案内した時、彼等は大量の食料を見て目を輝かせたものだった。しかし今、彼等の注意を惹くものは大量のダンボール箱ではなく生存者の声だ。そしてそれは返ってこなかった。

「とにかく荷物を運び出そう。ホバーに詰めるだけ積んでくれ。ここがダメだからって気を落としている暇はないんだ」

僕は壁に取り付けられていたAEDを引き剥がした。ケースに回転灯が着いていたが電源の落ちていたそれが点灯することはなかった。

次に搜索したのは何年前、職員全員がグルになって裏金作りに励んでいたのを新聞にすっぱ抜かれた県の庁舎だった。地下にはホモローチ侵入の形跡があった。つまり内臓を根こそぎ喰らい尽くさ

れた人間の死体が数十体転がっていたということだ。どれもが垢抜けないクールビズスタイルだったことから、彼等はここの職員だったのだろうと推測した。

「酷いな……」

床のどす黒い染みは血溜まりだったのだろう。惨状を直視こそしないもののギャーギャー騒ぎ出すことのない原田兄弟がありがたかった。

「タケ坊、こんな調子で生存者なんて見つかるもんかなあ？」

風真の声が不安げに揺れる。

「僕達は生き残ったろう？ 杜都市にも百人近い生存者が居たんだ」生存は適者の権利である。この状況を生き延びるにはホモローチから上手く身を隠す能力も必要だったはずだ。死骸の密集する場所ばかりを探索するのは間違いないのかも知れない。僕は屋外へ出て視覚と聴覚を解放した。しかしアンテナに触れるものは何もない。その後も十九の施設を探索したのだが、ひとりの生存者も見つけられずにいた。

中ノ原市を出て以来、僕はホモローチの数を数えていた。頭の中のカウンターは既に二千を超えている。区画法による個体数推定に則って計算すると、この鵜飼県だけで二万程度程度のホモローチが居たことになる。衝撃波、それがもたらした氷河期、更にはホモローチの襲撃があって伊都淵さんの言う通り、本当に2〜3パーセントの人が生き残れているのだろうか。考え込む僕を不安気な二対の細い目が見つめてくる。一番歳上の僕が塞ぎ込んでいる訳には行かない。気を取り直して言った。

「すぐそこに県警本部があったはずだ。警官ならみすみすホモローチにやられちゃうこともなかったんじゃないかな。行ってみよう」

「あっ！ そうか。警官なら拳銃も持ってるし、格闘技もやってるはずだもんな。行こう、行こう」

海地の声が弾んだ。パーティーに警官が加われば安心感も増すというものだ。さっきまで僕の後ろを走っていた原田兄弟が速度を

上げる。

県警の地下には確かに抵抗の跡があった。壁にめり込んだ銃弾や胸を撃ち抜かれた数体のホモローチも見られたが、その十倍を超える遺体が転がっていた。中には明らかに誤射と思われる人間の死体もあった。僕には理解出来ないことなのだが、遊園地で女子の様にキヤーキヤー叫ぶ成人男性が居る。そんな連中と一緒に時パニツクに陥れば、敵に襲われなくても、こうやって冷たい床に転がることになる可能性だってある。そして彼等の手に握られたS&Wにはミスファイアでもあったのか、雷管に打痕はあるが発射されていないカートリッジが残されていた。危機管理能力の欠如と責めるのは酷だろう。氷点下30℃での射撃訓練など我が国の警察機構では行なっていないのだから。

扉の開いたままの銃器保管庫を物珍しそうに見ていた海地が短機関銃MP5を手にして言った。

「これ、もらっちゃっていいかな？」

「自分の足を撃つのが関の山だぞ。それに見てみる――」

僕は制服警官が握っていたエジェクトポートに引っかかった9mmパラベラム弾が見えるSIGを手にとってみせた。

「地下でさえこうなんだ。屋外ではジャミング（装填不良）を起こして使い物にならないと思うぞ」

「そっかあ、まあ化物が全部死んじゃったならいいかい」

――今のところはな。僕はそれを声に出して言うことが出来なかった。生存者ひとり見つけれられていない状況で、兄弟を更に不安にさせる訳には行かなかったのだ。

廃墟――その言葉が僕に重くのしかかっていた。

人喰い

旧市街地の探索を成果なく終えた僕達は県境にある鍾乳洞へと向かっていた。吹雪は止んでいた。

夏涼しく冬温かいそこなら格好の避難場所になる。実際、原田さん一家が面倒を見ていたうちの幾人かも鍾乳洞跡で生きながらえていたのだし、ひとけのない山間ならホモローチの襲撃からも逃れられたのではないだろうか。そんな期待を持つてのことだった。

「今度こそ見つかるといいな」

「そうだな」

兄弟は大きな期待を抱くことがそれ以上の落胆を招くということを学んだようで、声に張りがない。特に兄の海地は言葉少なに相槌を打つだけとなっていた。心身をコントロールするのに希望だけでは役不足なのだ。こんな世界でなければ高校に通っていただろう二人に信念を植え付ける、僕はそんな努力をせねばならなかった。

「海賊の宝探しだって、最初っから見つかる訳じゃないだろう？」

僕達はこれから日本の最南端まで向かわなきゃならない。最後に数万人が一度に発見されるってことだってあるさ」

「だったら、一気に最南端まで行って戻るってのはどうなん？」

風真が提案する。

「あの赤いヤツの培養にだって時間がかかるんだろ？ 効率を考えたら探索を続けながら南下するってのが正解なんじゃないのかな。タケ坊はどう思う？」

「だな」

たった二歳しか違わなくても兄の方が学んでいたことは多かった。海地の言う通り、バイオ流体緩衝材の培養にかかる時間を考えれば風真の案では無駄が多くなる。勿論、生存者を発見し彼等がドームを作る気になってくれればという但し書きはつくが。

「そう言えばそうだな。兄ちゃん、意外と頭いいんじゃない。なんで

0点なんか取ったんだよ」

「うるさいなあ、何度も0点0点って言うなよ。タケ坊が俺をバカだと思っじゃないか。あれは理由があったのっ！」

「どんな理由だよ」

「そのうち話してやるさあ、今はだめだ」

「なんだよ、ケチ」

「ケチじゃねえ！ ケチって言うならお前にやったそのゴーグル返せよっ」

「一度、貰ったもんは俺んだもん」

二人の言い合いは子供の喧嘩に成り果てていた。荒涼とした氷原を駆け抜けながら僕はアヴリル・ラヴィーンを口ずさむ。兄弟の注意がこちらに向いた。

「何それ？」

「僕達はやり遂げられる。諦めるなって歌っている。Keep Holding Onって歌だよ」

「なんだ、アヴリルかあ。違う歌に聞こえたじゃん。タケ坊、音痴だな」

彼等を勇気づけようといった思惑とは違ったが、とにかく兄弟に笑顔が戻った。？真実が帰結する時、言葉は要らない？その部分は何度訊いても「ニクニクキュー」と僕の耳に響いた。それが僕の英語力のせいかなアヴリルのカナダ訛りのせいかはわからない。目指す鍾乳洞までは十分ほどの距離に居る。僕のアンテナに動きがあった。

「生存者だっ！」

洞穴に駆け込む人影を見て海地が叫んだ。追いかけてようとする彼を押しとどめて僕は言った。

「待てっ！ 様子が変だ」

ウィンドサーフィンのボードで氷上を駆ける原田兄弟も、ローラーブレードでホバーを引く僕も普通の人間には見えなかったかも知れない。それを警戒して姿を隠そうとすること自体、おかしい行動

ではなかった。ただ、洞穴全体から漂ってくるおどろおどろしい空気が僕を警戒させていた。周囲にホモローチの死骸は一体も見当たらなかった。

「なんで？ あれは間違いなく人間だったぜ。服だって着てたじゃん」

何がどう変なのかは僕にもよくわからなかった。ただ頭の中の警報が鳴り止まない。

「呼んでみようよ」

その場で風真が声を上げた。

「誰か居ますかー、助けに来ました、食料もトコログリアもありますー」

暫く待ってみるが反応はない。確かに洞穴の中に動きはある。それも複数の。ホモローチの気配ではない。ただ、それが人間のものだとも言い切れない何かを僕は感じ取っていた。

「入ってみようか？」

海地が僕を見て言った。

「待って、誰か出てくるっ！」

風真の声に僕達は洞穴に視線を集中させる。職員室跡から所教授を探して出発した時の僕のように、めいめいにボロ布を纏った七名の男女が姿を現した。その手には鉄パイプや棒切れが握られている。

「安心して下さい。バケモノじゃないですよ、ほら」

風真がゴーグルと顔を覆ったマフラーを取り去った。しかし、ゆらゆらと体を揺らしながら歩を進めてくる男女に何の変化も見られない。僕は脳波を探ってみた。

人間であることには間違いのないのだが、情緒的に健全なものが見つからない。ホモローチのように飢餓感と生存本能のみが彼等から発せられる全てであった。両手に鉄パイプを持った大男の海馬に微かな反応があった。僕はそこに意識を集中させ、そして驚愕のあまり数歩後ずさる。

何てこった……僕が見たものは口にするのもおぞましい光景だっ

た。衝撃波を生き延び、どこからか集まった彼等は同胞を、そしてホモローチまでも食料に代えていたのだ。男の記憶の中に洞穴の奥——人間とホモローチの骨が混在して積み上げられたシーンがクローズアップされていた。その行為が正気を失わせたのか、或いは体内に取り込んだ異形の細胞が何らかの変化を及ぼしたのかも知れない。彼等に感情・情緒といったものが一切感じられなかった。捕食獣をman-eater^{マンイーター}と呼ぶことは知っていた。ホール&オーツがそれを男喰いと歌って女性団体から抗議を受けたことも知っている。だが、僕達が対峙していたのは真正正銘の人喰いだったのだ。そんなものへの対応は伊都淵さんからも聞かされていなかった。

「逃げよう」

「えっ？ だって……」

僕が見たままのイメージを兄弟に送り付ける。二人には大きな衝撃だったろうが、一瞬で状況を理解してくれたようだ。ボードに向かってじりじりと後退を始める。少し遅れて僕も後退する。洞穴の住民達が襲いかかってきても対処出来るようバックステイティングで。ホバーまで下がると背中越しにひとつのダンボール箱を掴んだ。目の端でそれが魚の缶詰が入ったものであることを確認すると、左手洞穴に住人に向かって放り投げ、それが落下する前に蛮刀でまっぶたつに切り裂いた。正気を失っていた男女はその匂いに抗うことが出来ず、我先にとダンボール箱に駆け寄り、缶詰にむしゃぶりついていた。

「行こう」

その光景を呆然と眺めていた兄弟を促して、ようやく洞穴に背を向ける。追いかけてくる様子はなかったが僕達は懸命に駆け続けた。速度を上げることで、そこから遠く離れることで、先ほど脳裏に描かれたイメージを置き去りにすることが出来る。そう思いたかった。

三十分も走り続けただろうか、僕達が居たのは樹木と石、コンクリートを塗り固めて作られたモダンアートの庭園だった。無論？か

つての？と注釈は付く。外壁は崩れ落ち、なぎ倒された木々と建造物は氷に塗り固められている。膝を抱えボードに腰を下ろしていた海地がぽつりと言った。

「人ってあんな風になっちゃうんだな」

僕は酷使した足をエンジンアブーツから抜き出して人口皮膚が避けていないかを点検していた。

「俺、おっかないよ」

アイスギャングやマリアとの遭遇、ホモローチとの対決を経験してきた僕でさえ全身から血の気が引いてしまう様な感覚に襲われた。十六歳の風真が怯えるのも致し方のないことだった。

「あんなのが、あちこちに居るんだろうか？」

誰にともなく海地が問い掛ける。だとすればこの先、生存者の捜索は困難を極めるだろう。僕は衛星電話を取り出した。

——そうか、何せ、こんな状況だ。俺の想像を超えた事態になっていても不思議はないが、そこまでとは思わなかったよ。

「僕は奴等をあのままにしてみました。それは正しかったのでしょうか？」

——その洞穴に住人達がいつか正気を取り戻すかも知れない以上、襲われなければ手を出すべきではないだろうな。君の対応はそれで良かったんじゃないか。ただ、彼等の変化は希望が届くのが遅れたせいでもある。

相変わらず伊都淵さんの言葉には容赦がない。ここまでとは行かずとも雄さん並みの強さを僕は切望していた。このパーティーでは最年長となる僕である。風真同様、おっかなくはあったが、それを口にする訳には行かなかった。

「とにかく搜索を続けます。新たな情報や指示があれば知らせてください」

——わかった。

電話を切ると、僕は夕食にしようと兄弟に告げた。気の滅入るようなことが続いた今日だった。この上、空腹では悲観的な考えしか

浮かばないものだ。あのイメージが僕達から食欲を奪っていたが、とにかく缶詰とアルファ米の夕食を腹へと詰め込んだ。

「少し休んだら一気に湖にかかる橋まで向かおう。今日の搜索はそこまでだ」

「……うん」

「気乗りしなきゃ帰ってもいいぞ。僕は責めない。ただ、その場合は二人一緒だ。無事にドームまで帰りついて欲しい」

兄弟はしばし顔を見合わせていたが、僕に向けて言葉を発するとはなかった。

遭遇

意外、そう言うのは原田兄弟に失礼だろう。彼等のはしゃぐ声で目覚めた僕は、湖にかかった橋の残骸をサーフボードで滑降する二人を見て嬉しくて堪らなかった。この旅が単独行になる寂しさを覚悟していた。兄弟が起きて動き出した気配を意識の片隅で感じた時、彼等はドームに帰るつもりだとばかり思っていた。

「そこでバルカンを決めるぞ、見てろ」

海地は、傾斜を下ってきたかと思うとジャンプしながら180℃ターンをしてリグを返す。ウィンドサーフィンをやったことのない僕が見ても、かなりの離れ業のように見えた。

「すっげー、完璧じゃん」

風真の喝采に気を良くしたのか海地は再びボードを抱えて傾斜を登って行く。マストは取り外されていた。僕は動きを止めていた脳味噌に火をいれた。

「次はフォワードループだ」

それがどんな技なのかは知らないが、語感から前方宙返りではないかと思っていた。先ほどより高い位置から滑り降りてくる海地のボードからガリッという嫌な音が聞こえた。前輪の片方が脱落したようで、ボードが妙な角度に傾いたままの滑降となっている。飛び降りようにもフットストラップに彼の履いていたワークブーツがガツチリ嵌り込んで、それを許さない。僕は跳ね起きた。

股関節のキャパシティがどれほどのものか試したことはないが、恐らく僕はチーターより早く走れるようになっていたのだろう。同時に視力を解放しなければ海地の姿を見失うほどの速度だった。宙に投げ出された海地が描く放物線を予測し落下地点に入る。一緒に舞い上がったボードは空中でようやく海地を拘束から解き放つていた。

重力加速度はあったが、元々痩せっぽちの海地の体を支えること

など今の僕には雑作もないことだ。衝撃を緩めるため彼の体を宙で受け止めて地表に降り立つ。何が起こったのかわからない様子の海地を立たせると風真が走り寄って言った。

「タケ坊……どこに居たんだい？ 全然、見えなかったよ」

僕はホバーを指差す。

「寝てた。凄いな、さっきの技」

「調子に乗り過ぎちゃったな……タケ坊が居なきゃ大怪我するところだったよ、ありがとう」

素直に感謝を述べる海地だった。特に口うるさく注意しなくても、二度とこんな真似はすまい。ホバーにもたれて朝食を取っていた僕達に、思いもよらない方向から拍手が起こった。

「凄いな、ウインドサーフインは見慣れているけど、さっきのは殆どサーカスだった」

ホバーを停めていた場所から15m程北、高さ3m程の氷解の陰から、ひい、ふう、みい、よう——五人の人影が姿を現した。全員がエヴァンゲリオンみたいになかったいいヘルメットを被っている。いつからそこに居たのだろう。原田兄弟のアクロバットに紛れて忍び寄っていたのだろうか。警戒を怠っていたことが悔やまれる。僕達はそっと食器を置いて身構える。拍手をした男は臆する様子もなく近づいてきた。

「こんな世界になっても趣味に興じることが出来るものなんだな。

若いつてことは素晴らしいものだ。真柴です。宜しく」

ヘルメットを脱いだ男性が手を差し伸べてくる。伊都淵さんと同じくらいの年格好に見える。脳波に悪意はない。今度こそ本当の——言葉も感情も失っていない人間らしい——生存者に巡りあうことが出来たようだ。僕は嬉しくなった。

「小野木といいます。こっちは原田海地と風真、兄弟です。当たり前のことを聞くようですが、あなた方は生存者ですよね」

僕は真柴さんの手を握り返して言った。力強い握手には親愛の情

が込められている。彼は僕達の目を覗き込んで言った。

「ああ、君達もそうみたいだね、トコログリアは——済んでいるよ
うだな。どこから来たんだい？　住む所はあるのかい？」

あれだけ探して見つからなかった生存者がいきなり現れて驚いて
しまったことを差し引いても、真柴さんの言動は本来なら僕が先に
口にせねばいけないものだ。彼の冷静な立ち振る舞いは僕が一日も
早く身に付けねばならないものだった。

「隣の県から来ました。真柴さん達はどちらに？」

「鵜飼県か——以前、僕も井ノ口市に住んでいた。というか、出張
でこっちに来ている時に例の災害にあったね。我々はここから20
km程西に行った所に住んでいる。今この国が置かれている状況、
背中の黒い人間達について情報があるなら教えてくれないか。電話
もインターネットも通じなくなっていてね」

僕は手短に、且つ要点を確実に伝える。氷の世界を漂流している
うちに気が狂れてしまった若者の戯言にでも思えたのだろう。日本
が南極の座標に引越したというくだりでは彼等のうち数人から失
笑が上がった。しかし僕達が東北のカリスマの指示で動いているこ
と、ホモローチに関する情報を語る段になると、彼等全員がヘルメ
ットを脱いで聞き入ってくれていた。

「奇想天外過ぎて戸惑っているが、どうやら信じるしかなさそうだ
な」

真柴さんが顔を振ると、残りの四人も頷いた。斎藤と自己紹介を
された小太りの男性が口を開く。こちらはもう少し年齢がいつてい
るようだ。雄さんが持っていたのと同じメーカーのホログラムマッ
プを手をしている。

「その氷のドームを作るのに必要なバイオハザードってのは手に入
るのかい？」

「バイオ流体緩衝材です。胚と培養槽の設計図を持っています」

「人が地下で生活しているようでは日本の再建は有り得ない、か。
確かにその通りだな。我々のコミュニティに案内しよう。是非、力

を貸して欲しい」

「はいっ！」

彼等の移動手段は徒歩であった。そして海地のボードも修理が必要となっていたため、たった20kmの移動に四時間を費やすことになる。悪天候でなかったのが幸いだった。

僕は笑った。何故かって？ フルフェイス型のヘルメットはチークパッドが文字通り頬を圧迫する。エヴァンゲリオンの全員が口笛を吹いているような——言うなれば数字の3を引っくり返した様な——口になっていたからだ。それはイケメンの真柴さんでさえそうだった。

自分は機械屋だと、真柴さんは言った。建機リースの会社に営業に来ていた時、あの衝撃波に見舞われたそうだ。横転したシヨベルローダーのバケットに閉じ込められて意識を失い、手にしていた商品サンプルで氷を砕き、丸24時間かけて脱出したという。凄まじいまでの生への執着だ。氷の街を放浪中に出逢った数人とカラオケ屋の地下に避難して倉庫の冷凍食品をそのまま食べることで餓えをしのぎ、ホモローチが死に絶えたことを確認してから倒壊の少ない地下室のある建造物を移動し続けていると話してくれた。僕達が警察所や庁舎を探してきたことを告げると「その手があったか」と悔しがられ「しかしこう見渡す限り氷漬けでは、それを見つけるのも難しかっただろう」と付け加えられた。

「そして今は、ここに住んでいる」

戦争映画で見たトーチカの小型のような物を指差して真柴さんは言った。

「建物が吹き飛ばされる前はエレベーターで出入りしていたんだろ。うな。斎藤さんが氷を踏み抜いてくれたお陰で見つけられたんだ。少し高さはあるが飛び降りてくれるかい」

覗き込む空間はエレベーターのカゴひとつ分の容量だ。先に飛び降りた海地がひゅーっと口笛を鳴らす。

「これは……」

杜都市の地下要塞然としたもののほどではないが、分厚い扉を開けた先に続く長い回廊は圧巻だった。

「どっかの金持ちが道楽で作ったか、はたまた強迫観念にとりつかれたのか、いずれにせよ見ず知らずの我々が住むことになるとは思ってもみなかったろうな」

真柴さんはにやりと笑って僕を奥へと誘う。ドアの上にはそれぞれ？機関室？？倉庫？などと書かれていた。何やら巨大な蟻の巣に迷い込んだような気分だった。

「この六名を含む二十三人がここで暮らしている」

「電源はどうしているんですか？」

「LPG発電機だよ、さっき通った機関室にある。ただそれも長くは保たない。だから、ああやって外に出ては物資の補給に励んでいるんだ」

気づけば汗が滲みそうな温度だった。僕は体温を2℃下げた。

「トコログリア未接種の方はいらっしゃいますか？ 薬品とカテゴリーがホバーにあります」

「お年寄りが二人未接種だが、無理だろう。あの激痛に耐えられるだけの体力はない。だから、こうして暖房を入れざるを得ないんだ」
そうだった、所教授が処置を見合わせた大半はお年寄りだったそう。接種にはかなりの激痛が伴う。麻酔のない現状で体力の衰えたお年寄りへの処置は無謀に思えた。

「会議室に住民を集める。さっきの話をもう一度聞かせてやってくれないか？」

「わかりました。ホバーの荷物を運び入れましょう。食料と防災グッズが相当数あります」

「君達の分は残さなくていいのかい？」

「中ノ原市を出た僕達は手ぶらだったんです。ホバーの荷物はあちこちのシェルターに手つかずで残されていた物を失敬してきたものです。足りなくなればまたどこかの氷を掘り返します」

「掘り返す？ 君達は削岩機でも持っているのかい？」

「いえ、これです」

僕はリュックに差し込まれた蛮刀をしめす。伊都淵さんの指示で動いている僕が普通でないことは理解してもらえていたようだ。

「そうか、じゃあご好意に甘えさせてもらうとしよう」

真柴さんがドアを開けた部屋には十数名の人々が居て、壁にもたれたり机に腰かけたりと思いい思いの滑降で原田兄弟の武勇伝に耳を傾けていた。

「ホバーの荷物を全部運びこんでくれ」

真柴さんの指示で全員が席を立ち、機敏な動作で僕の脇を走り抜けて行く。武勇伝の披露を打ち切られた原田兄弟は幾らか不満そうな顔をしていたが、すぐに彼等の後続に続いた。

「これを見てください」

スタンバイ状態のパソコンにUSBメモリを差し込んで開く。フォルダにはドームの設計図、バイオ流体緩衝材の培養法などが入っている。

「燃料さえあれば……」

真柴さんが目を止めたのは軽トラックをクローラに改造するためのノウハウが書かれたファイルだった。

人間重機

「決して荒唐無稽な話ではないと思うんだが、どうだろう」

話し終えた僕の後を引き取って真柴さんが言った。

「でも、本当に東北のカリスマがそう言ったのかなあ。その中ノ原市のドームだって実際に見た訳じゃないんだろう？ だいたい南極に引っ越すほど地軸がずれて、これで済むものかねえ」

手を挙げて発言した男性は見たところ僕と同年輩だった。やはり僕や原田兄弟の外見は頼りなく感じられ反感も買うようだ。ムツとした顔で身を乗り出そうとする風真を押しとどめる。頭のいい人間は、こういった錯覚によく陥るものだ。自分が受け入れ難い現実には信じようとしなない。

「どうでしょう、未だかつてこんな規模で地軸がずれた試しはないんです。おそらくあなたの言う疑問は自分自身の常識に照らし合わせて生み出されたものでしょう。ですが現実はどうなっている。1プラス1が2であるといった常識は捨て去るべきではないでしょうか。衝撃波が襲った直後、僕はオーロラも見ました。あなたに納得のゆく説明をしていただけるなら東北のカリスマに進言してみます
が」

自説はないが、とりあえず反対しておけ。この世界に野党の役割など要らない。言い負かすつもりなどなかったが、若い男は気まずそうに押し黙った。

「ドームと培養槽の設計図はしっかりしたものだったわ。彼の言う通り、いつまでも地下で暮らしている訳には行かないでしょう」

小柄で瞳の大きな女性が発言する。真柴さんは、他に意見はないかといった様子で会議の参加者を見回した。お年寄りの姿はないが二十一名がこの会議室に揃っている。つまりは住民全員が参加していることになる。

「イグルーの巨大版だと考えて下さい。材料は氷とバイオ流体緩衝

材のみ。中ノ原市のはそうやって立てました。チェーンソーでもあれば氷の切断は容易になります。幸い、座標がどうなろうとここは日本です。氷を掘り返せば大抵の物は見つかります」

「建設機械もなしで出来るものなんですか？ その氷のドームというのは」

片方のレンズにヒビの入った眼鏡の男性が言った。僕は真柴さんに訊ねる。

「真柴さんが被災した時に居られた建機リースの会社は近くなんですか？」

「2kmくらいかな、どうしてそんなことを？」

「ドームの高さはせいぜい18m程度です。手作業でも不可能ではありませんが、油圧ショベルかホイールローダでもあれば作業の効率は上がります。中ノ原市でもそうしていました」

それは真柴さんに答えたつもりだったが、集まった人々にも聞こえてしまったようだ。最前列に座った男性が挙手もせず皮肉っぽく言った。

「燃料はどうするんだい？ ガソリンスタンドは営業してないんだぜ」

まばらな無精髭を生やした三十歳には届いてないだろうその男性もドーム建造に反対だったようだ。積極的なのは真柴さんと先ほどの女性と湖跡で逢った5名。それ以外は反対か、状況を静観しているといった感じだった。反対派の思惑はシェルターで身を縮こめて災禍が去るのを待とうとでもいうのか。行動を起こさねば何も始まらないということが彼等にはわかってなかった。十五年ほど前、何事にも消極的な人々を称して？ 草食系？ と呼んでいた。乱暴を承知で言うなら、この世界で真っ先に死んでいったのはそんな人々ではないのだろうか。

「ガソリンスタンド跡からタンクを掘り返します」

僕としては大真面目に答えたつもりなのだが、聴衆の中から笑いが起こる。「バカバカしい」「重機を動かす燃料がないのにどうや

って掘り起こすつもりだ」

地下タンクが埋められているのはせいぜい5 m程度の深さだ。蛮刀で氷とコンクリートを割れば掘り出すことは可能だ。建機屋に砕岩用のアタッチメントがあれば尚良い。現に中ノ原市でもそうやって燃料を調達していたのだ。

「そんな夢みたいなのが出来るなら、俺もドーム建造に賛成するよ。いや、参加させて下さいとお願いしちゃうかな」

最初に発言した男性がふざけた調子でそう言うのと、まばら髭もヒビ眼鏡も賛同した。真柴さんは困惑したような目で僕を見た。僕は赤壁で十万本の矢をまかなってくる諸葛亮の気分になっていた。ただ残念なことに、対立していた人々に周瑜の才覚はなさそうだった。「建機屋の場所を教えて下さい。真柴さんはバイオ流体緩衝材の培養を始めていて下さい。シェルター壁面の補強にも使える訳ですし、それを反対する人は居ませんよね？」

僕は会議室の面々を見回す。「このおおばら吹きめ」と言った顔が過半数を占めていた。

「大丈夫なん？ あんな大見得きっちゃって」

「ボードと重機では比べ物にならないじゃん」

「任せとけ」

僕と原田兄弟は真柴さんに聞いた重機屋へと向かっていた。二人が心配げな顔で問い掛けてくる。氷のドームに合流してすぐにこの旅に連れ出した彼等は、惜しいかな僕の大活躍を見ていない。雄さんと二人で重機を引きずり上げた現場を見ていれば聞けなかった言葉だ。

「話は変わるけど、これ楽ちんだな」

二人は僕が引くホバーに乗っかっていた。当初の予定ではボードに修理が必要な海地だけ乗せ、風真は走らせるはずだったのだが「不公平だ」との申し立てにより僕は再び橇犬となっていたのだ。

800 m向こうの氷塊にキャタピラの一部を見つけると、僕は速

度を上げた。「おおっと……」ホバーに立っていた風真がよろける。

建機屋の建物はどこまで吹き飛んでしまったのか、油圧ショベルにディーゼル発電機にフォークリフト、後はコンプレッサーだろうか、それらがひと塊になって凍りついていた以外何も見当たらない。目的のアタッチメントは見つからなかったが硬ければ何でも構わない。蚤刀で氷を割って油圧ショベルからエクステンションを取り外すと、そいつを振りかぶっては地面の氷を割り始める。薪割りの要領だ。呆氣にとられる原田兄弟を尻目に、二十分程でコンクリートのドライブウェイが露出した。家屋の解体現場を思い浮かべてもらうといい。エクステンションを振り回しているのがバイオ重機（僕）なだけで、コンクリートなど木っ端微塵に碎けてゆく。一時間程で上部スラブという鉄筋の枠組みが露出していた。ここからはタンクを傷つけないよう、慎重に作業を進めねばならない。前にも言ったが、僕は不器用この上ない。7歳の誕生日に父さんに買ってもらったトランスフォーマーのプラモデルさえともに組み立てられないほどに。我ながらお恥ずかしい話ではあるが接着剤を乾かせる数秒が待てないのだ。「もう出来たのか？」と覗きにきた父さんは、接着剤だらけ指紋だらけの完成品を見て「まあ人には向き不向きといったものがあるからな」と寂しげな表情を浮かべたものだった。そして父さんの手先も不器用この上ない、そう母さんは言っていた。

話を戻そう。油圧ショベルの脇で氷漬けになっていた素線の太いワイヤをかけスラブを綱引きの要領で引っ張る。分厚い手袋が引き裂けそうになった瞬間、バリバリという音と共にひん曲がった鉄筋が剥がれてきて僕はもんどりうって後方に倒れ込む。すぐさま起き上がると、みつつ並んだタンクの匂いを嗅いで回る。これだっ！

軽油のタンクを掴んで引きずり出した。なんと、ここまでの所要時間たったの三時間。ついでに横倒しになったままの油圧ショベルを起こす。原田兄弟の顎関節は完全に外れてしまったようで大きく開いた口が閉じられることはなかった。乾いた口の中を何度か唾で

湿すと風真が言った。

「タケぼ……丈さん、ひょっとしてガンダム？」

「いいよ、今更？さん？なんて言わなくなったって」

「良かったあ、俺達、本当は鈴木さんのグループに入った方が安心じゃないかと思ってたんだよ。だってボクシングのチャンピオンだもんな。でも、タケ……坊はプロレスのチャンピオンぐらい力持ちなんだな」

若者は正直だ。しかし、いくらプロレスラーと言えどもここまでは出来ないだろう。とにかくにも僕は原田兄弟からいくばくかの尊敬を勝ち取っていた。そして大きな問題に気づく。

「……これ、どうやって運ぶんだ？ 転がして行く訳にはいかなだよな、中身がこぼれ出ちゃうもん」

「バケットに積みばいいだろう。燃料だって空っケツって訳でもないはずだ」

「動くのか？ それ」

僕は急いで油圧シヨベルの操縦席に飛び乗った。シュンシュンシンカチカチカチ……

バッテリーが上がっているようだった。最後にカチッと言ったきり鳴りを潜めたセルモーター同様、僕は意気消沈していた。

バッテリーパックを借りに戻った僕を冷ややかに見ていた人々は、その一時間後、油圧シヨベルに軽油タンクを積んで凱旋した僕達に驚愕の視線を送ることとなる。真柴さんですら「どんな魔法を使っただんだい」と訊いてきたほどだった。そして僕は得意気に答えた。

「世の中に魔法などという便利なものはありませんよ」

アイデア（僕の発案ではなかったが）は実行に移してこそ、評価の対象となる。「出来るもんか」「夢物語だ」と能書きだけ垂れて体を動かさない連中に、人のアイデアをけなす資格などない。僕は身をもってそれを知らしめ、ドーム建造に反対の声を封じ込めたのだ。

「建機屋の跡にはディーゼル発電機とフォークリフトもありました。どなたか一緒に行ってもらえませんか。ついでにホームセンターか電動工具屋のあった場所を教えて下さい。切断工具を探してきます」
「手伝おう、おいっ」

真柴さんの声に、全員が支度を始めた。あるはずのない魔法の正体を見極めたかったのだろう。

雄一郎のパーティー

丈のように特異な能力がなければ搜索の方法は限られる。ホログラムマップと地形を照らし合わせながら、地下シェルターのありそうな場所、建造物の被害が少なかった場所を雄一郎のパーティーは探し続けた。こうなってしまった世界では柔軟な思考の持ち主でなければ生き残れてはいないだろうと、ホモローチの死骸が多く残る場所の搜索から切り替えたのは、丈より経験値が高く冷静な雄一郎ならではの判断だった。伊都淵が何度も言ったように残された時間がどれだけあるのかはわからない。足を止め、大雑把に搜索をする。反応も痕跡もなければ諦め、さっさと次へ向かわざるを得ない。？

まずは南下して東に？そうやって行進を進めてきた雄一郎のパーティーは、かつて海だった場所に出ていた。時折顔をのぞかせる陽光が氷を溶かしかけている。この分なら次世代のホモローチとて海を渡ってはこれまい。雄一郎はそう考えていた。

——丈が見つけたように山間部にも生存者が居るのでは？

——勿論、居るだろう、居て欲しいとも願う。だが次の衝撃波に襲われた時、氷雪崩の危険がある山間部にドームの建造を進めることは出来ない。橇とローラーブレードが移動手段といった物理的な問題もある。全てを救うのが無理なら確実な方を優先すべきだ。残念ながら現状では？日本を隈なく？といった訳には行かないんだ。

雄一郎の疑問に、伊都淵はそう答えた。それ故の平坦地搜索だった。もどかしさはあったが、致し方ないことのようにも思っていた。

「誰も居ませんね」

ローラーブレードの速度に合わせ、井上と榊の乗せた橇を引かせるには六頭の犬では負担が大きい。気温に大きな変化はないが凍土が顔を出している所もある。行程の半分をその足で走っていた榊と井上の声には疲労の色が滲んでいた。

「少し、休もう」

雄一郎の右腕にも、丈のような食料の現地調達能力はある。ただ、それを解放することを躊躇していた。万が一、右腕が勝手にクロスボウを掴んで発射したら、雄一郎はそれを恐れていた。

氷塊をハンドトーチで溶かして犬達に与えると、残りをペットボトルに注ぎ込む。三人で回し飲みをすれば水はすぐに空になる。それでも道中で発見した防災グッズの詰められたバッグには手をつけなかった。ドームでの暮らしぶりからすれば犬達にも、榊と井上にも我慢を強いらせているのは間違いない。そんな不平を言わない彼等に雄一郎は感謝していた。

「丈君の方はどうなんでしょうね。例え数人でも見つけているのでしょうか」

同じ思いだったのだろう。榊の問い掛けに井上も顔を上げて雄一郎を見つめる。

「伊都淵さんに定時連絡は入るはずだ。その時に訊いてみるよ」

「そうですね……」

腰を上げた榊が犬達にビスケットを配って回る。よく咀嚼もせず、呑み込む犬達の空腹が雄一郎にも伝わり、スモークした猪の肉をコートのポケットから取り出してかぶりついた。それを見ていたパーティーのメンバーも雄一郎を真似る。

「チップには何を使ったんでしょうね」

井上が顔をしかめた。肉の臭みは全く抜けておらず塩味のみが強調されていた。

「廃材だよ。下手するとベニヤ板かも知れない」

「だから、この味なんですか……八歩のビスケットと交換してもらうかな」

名前を呼ばれたアラスカンマラミュートが伏せていた顔を上げて井上を見る。

「じゃあ、俺は二歩と交渉しよう」

榊の声に反応したのはシベリアンハスキーだった。

「よし、出掛けよう。海岸線を走ることになるから犬はパラレルに

繋ぎ直すんだ。川の手前は慎重に進むんだぞ」

扇形に犬を配列する繋ぎ方はファン・タイプとも呼ばれる。速度は落ちるが、氷河やクレバスに数珠繋ぎで落ち込んでしまうのを避けるには適している。橇に乗らないどころかは小走りとなるため、速度を優先する必要はない。氷塊が多く進路が狭い場合にのみタンDEMに繋ぎ変えていた。

「了解です」

たった十分の休息だが、彼等の表情に精気が戻っていた。吹雪の止んだ空には輪郭のはっきりしない太陽が顔をのぞかせている。ハーネスを繋ぎながら犬達の足を調べる所作も、繰り返す毎に手馴れてきていた。

「ハイクツ！」

井上の号令で橇は走り出した。

「もうしばらくで運河のあった辺りになる。速度を落として左旋回だ」

ホログラムマップに映し出される地形を見て、雄一郎は注意を与えた。

「了解っ、ハーツ！」

マッシャー（橇の操縦士）は櫓に代わっていた。数十メートル先に見える大きな氷塊が障害物となっており、海岸側へ迂回する危険を避ける。速度はトロットまで落していた。

何故こんなところに？ 雄一郎の疑問は氷塊をグルリと囲むホモローチの死骸に向けられる。お馴染みとなった頭部が破裂したものでなく、腹部を撃ち抜かれたようなもの、腕を切り落とされたものもあった。目の端に何かの動きを捉えた。

「待てっ、止まれっ！」

雄一郎が声を上げたのに続いて右端に居た八歩が吼える。

「何か見つけたんですか？ もしかして生存者ですか？」

「まだわからない、だが見てみる」

雄一郎の指差す先に目を凝らすと、粉塵でグレイになった氷塊の奥の層に赤い煌めきが見える。あつ、と井上は小さく声を洩らす。先入観から地下への通路ばかり探していたことが愚かしく思えた。あいつなら今までの行程で何かを発見していたのかも知れない、雄一郎は農園で暮らしていた頃から柔軟な思考を見せる丈を羨ましく思っていた。

「これは自然に固まったものじゃない。あそこで光っているのはバイオ流体緩衝材だ」

衝撃波で亀裂の生じたコンクリートからにじみ出たそれが氷の一部を赤く染め上げていた。櫓を降りてきた榊も二人に肩を並べてくる。

「すると、ここは……」

榊が手を置こうとした氷壁がスルスルと奥に開いて行く。ここが入り口だったのか——三人は息を呑んで次なる展開を待った。半行程開いた扉からぐいっと突き出された物の正体がわかれると雄一郎は腰に差したクロスボウに手を伸ばす。黒光りする銃身は三人を舐めまわした後、一番体格のいい榊に固定された。

「誰だ、お前等は」

幾重にも顔を覆う布の奥からくぐもった声が発せられた。

「待ってください。我々は怪しい者ではありません。生存者を探してトコログリアや防災グッズを届けるのが目的なんです」

雄一郎が言う銃身は彼に向く。目深に被った帽子と布から覗く目に警戒の色は消えない。男の指はトリガーにかかっている。まずいな、このまま発泡されると誰かに当たってしまう。後ろ手に回した手を戻すと、本来のオーソドックススタイル——スピードに勝る左手を前に——足を踏み変え、マスクとゴーグルを外した。

「お前、どこかで見た顔……あつ」

暫くあって男が銃身を下ろす。

「鈴木雄一郎かっ！」

「そうですけど、あなたは？」

男が手間取りながら幾重にも巻かれた布を外し出す。まどろっこしくなったのか、銃を扉にもたせかけ両手で乱暴に引き剥がして行く。

「俺だよ、足立だ」

ようやく布を取り去ると帽子を脱いで全身を扉からぬうと出してくる。眉も髪もかなり白くなってしまった男の顔があらわれる。記憶の引き出しを探っていた雄一郎の顔が懐かしさに綻んだ。

「足立さんでしたか。ご無事だったんですね。何よりです」

ボクシングの師である鍛冶が現役時代に所属していたジム、そして赤字のジム運営のため自動車の整備工場を経営していた足立忍、その人であった。七十代も後半に入っていたはずだが身のこなしに老人を感じさせるものはない。高校時代に関東のジムにスカウトされた雄一郎の試合を何度か観戦にもきてくれており、その際鍛冶に紹介されて親交のあった足立との再会は六年振りのことだった。

「カジの奴が災害の備えをしろうとするさく言ってきたくれたお陰だよ。この建物――今は水に覆われてしまっているが、これを立てておいたから生き延びることが出来たようなものだ。カジはどうしているんだ？ おっと、世界チャンピオンをこんな所に立たせておく訳にもいかな。懐かしさのあまりすっかり昔に戻ったようなつもりでいたらしい。儂としたことが――銃を突きつけたことも謝らないとな。入ってくれ、そっちの二人も」

灯りもなく、目が慣れるまで少々時間はかかったが、高さ3mに満たない半球型の建物は打ちっぱなしのコンクリートにバイオ流体緩衝材を流し込んだものだった。直径8mほどのその内側はかまぐらの様な形をしていたが幾度も氷が積み重なって行くうちに倒壊したビルが固められたようなカモフラージュが成されていた。上手く衝撃波は逃れたが、全ての備えが万全ではなかったようで7、8名の生存者が体を寄せ合って冷たいコンクリートの床に板切れを敷いて座っていた。彼等の瞳に精気が感じられないのは、屋内の暗さのせいばかりではないだろう。

防災グッズのバッグをひとつ開けてろうそくを灯すと数名が雄一郎達の周りにやってきた。訊ねられるままに地球の状況、ホモローチの正体についての意見を述べる。生存者の見込みや日本の置かれた状況が彼等に与えた衝撃は大きく、国の再建に力を合わせて頑張ろうといった言葉も、彼等に希望を与えるまでの効果はない。

「あれが来た時、うちは業務時間だった。工場に居た笑い連中は機材や車の下敷きになったり、建物ごと吹き飛ばされたりして行方がわからない。ジムも見に行ったが跡形もなかったよ」

工場の事務職だった人々だろう。初老の男性二人は怪我を負っており、それ以外は女性ばかり。さもなければ足立が銃を構えて外に出ることなどなかったはずだ。

「知り合いにトコログリアや災害の件も知らせたが、都会の人間は疑り深くってな。もう鍛冶のことを覚えている人も少なくなった。あの時、儂がもう少し強く言い聞かせておれば、これっぽちの人間しか生き残れない状況にはならなかったろうに。尤も、その気になった連中が居たとしてもあの赤いのは品薄だったようで、儂もカジが届けてくれた胚を知り合いの工務店に培養してもらって間に合わせたから、こうしていられる。あいつにはどれだけ感謝してもし切れん」

しみじみと語る足立だった。しかしバイオ流体緩衝材はシェルター建造の図面があれば無償で送り出していたはずだった。高速道路や新幹線の架橋工事も終わっており大量に必要とする工事の報道などなかった気がする。ではあれは一体どこへ出荷されていたのだろう？ 専用容器に詰められ毎日大型のトラックで運び出されて行くのを目にしていた雄一郎に大きな疑問として残った。

「ホモローチの射殺体がありました。足立会長が撃たれたんですか？」

豊饒たる振る舞いを見せる足立が銃を杖代わりにしているのが不安で訊ねてみる。暴発でも起こせば病院のないこの世界では命取りになる。

「これか？ 安心してくれ、弾は入ってない。あの化物どもを撃つたのはその御人だよ」

床に横たわったひとりを足立は指差した。

「ポン刀とこの猟銃片手にバケモノをなぎ倒しながらここまでたどり着いたようだが怪我をされている。医者に診せてやろうにも、その医者がどこにいるのかもわからん」

「そうでしたか」

毛布を鼻辺りまで掛けられた男の顔はさほど若くも見えない。どこからやってきたのかはともかく、丈の様にホモローチを追い払う術もない普通の人間がやろうとして出来ることではない。時折、苦痛に顔を歪める男の顔は中南米のボクサーに多くみられた？ 修羅場に慣れた？ 雰囲気があった。

「社長、私も……」

目だけは露出しているが布をブルカのように巻いた女性が足立に声をかける。恥ずかしげに目を伏せる様子から、用足しなのだろうと察して雄一郎は気づかないふりをする。

「ああ、気をつけてな。こんな世界だ、恥ずかしいより生き延びることが大切なんだ。あまり遠くに行くんじゃないぞ」

「……はい」

ここに気づくことになったのも別の誰かがそのために外に出ていたところを雄一郎と八歩が目にとめたのだった。まともな男手もなく、誠のように何でも作ってしまう人間が居なければ当たり前の日常さえ滞ることになる。《生存者を見つけてドームの建造を》それがどれほど難しいことなのかを痛感する雄一郎だった。

決断

「食料を運び込みます」

足立にそう言って、雄一郎は榊と井上を外に連れ出した。

「どう思う？」

訊かれた榊が首を傾げて言った。

「ドーム建造ですか？ 男性四人のうち三人が負傷していて足立さんは高齢、他は全部女性では難しいのではないでしょうか、なあ」
振られた井上も肯首で同意をしめす。雄一郎も同じ意見だった。
ならばどうする？ 結論はすぐに出た。衛星電話を取り出し誠に連絡をとる。

「ドームから直線で160kmほどの距離だ。生存者は今のところ九名。回収は可能か？」

「50km圏までたどり着けば短波無線機が通じるんだろうけど、コンパスも使えない状況では難しいかも知れない。誰かひとり戻す訳には行かないか？」

雄一郎は考えた。生存者の搜索は丈のチームとの競争ではない。今、命を長らえている人々の未来を案ずるなら不安の芽は摘み取っておく。それも意義のあることだと考えた。

「榊君を橇で帰そう。ホログラムマップに現在地点を記して持たせる。怪我人が三名居るんだ。クローラは完成したのか？」

丈が持って帰った横転した軽トラックに、誠はコンバインのクローラを組み合わせて製作中だった。伊都淵のEVクローラを真似て作られたその全天候型ビークルは、雄一郎が中ノ原を発つ時、ほぼ完成しているように見えていた。

「ああ、ただ九人を一度に運ぶとなると橇をけん引した方がいいだろうな。運転席はひしゃげてひとりしか乗れないから荷台に怪我人を乗せ、他は橇だ。燃費に多少不安はあるけど、なんとかなるだろう」

話は決まった。三人は櫥一杯に詰め込まれた食料と防災グッズを屋内に運び込む。缶詰やエネルギーバーの名前が書かれたダンボールが積み上げられてゆくと、人々の表情に少しだけ明るさが戻る。「いいんですか？　あなた達の分がなくなってしまうのではありませんか？」

ブルカもどきのせいで年格好は判然としないが、声の様子から若いことだけはわかる。心配げに訊ねる女性に雄一郎は言った。

「これは、ここに来るまでにあちこちのシェルターから集めてきたものです。若く怪我もしていない我々です。どこでも補充は利きます。悲しいことにこれらの備蓄は消費する側の数より多く残っているようです。防災グッズの中には手回し充電式のライトや使い捨てカイロも入っています、確か温かいご飯も食べられるように――」雄一郎はバッグを逆さまに引っくり返す。

「これこれ、加熱剤を水に入れて……読めばわかりますよね。暗い所で冷たい食事ばかりしては気も塞ぐばかりですから。遠慮せずにどうぞ」

「……ありがとうございます」

礼を言う女性の肩と声が震えていた。

「あたし、藤井亜希子といいます。鈴木さんの試合は社長に連れて行ってもらって見たことがあります。海外での試合もテレビで観ました。凄かったです、あの左フックのダブル」

「それはどうも」

国民のテレビ離れが進み、スポンサーとなるべき企業が軒並み赤字決算となる中、テレビ番組は安く買うことの出来る韓国ドラマばかりとなっていた。雄一郎のタイトルマッチはペイパービューで見られなかったはずだ。愛想のない返事となってしまったのは、それを若い女性が観ていたことに対する驚きのせいでもある。

最後に運び込んだのは下着と生理用品が詰められた箱だった。丈がつけ出してきたものの中で、中ノ原の女性達が一番喜んだもののひとつだった。中身をどう説明してよいか悩んだ挙句、無言で手

渡す。中を覗いた亜希子は目を輝かせて同僚らしき女性達の許に運んで行った。

次に雄一郎はバッグから出した温熱シートを横たわっている男の体を包むように巻きつけ、その上から使い捨てカイロを貼り付けた。天性の調達屋だった丈が見つけれなかったもの――気付け薬に使えるウイスキーやブランデー――は雄一郎がホテル跡から探し出していた。但し、ミニバーの小瓶ではあったが。それを男の口に流し込む。瞼を開いて眺める虹彩にトコログリアの反応は見られなかった。そして榊に言った。

「トコログリアが入った箱を持ってきてくれないか」

「鈴木さんがやるんですか？　ここで？」

「低体温症の症状が出ている。このままではこの人は助からない。麻酔があるわけじゃない、やるなら気を失っている今しかない。君もあの痛みを覚えているだろう？　梓先生から厳しいレクチャーを受けたから大丈夫だ。頭が動かない様に押さえていて欲しい。井上君、君は犬達に食事をさせて休ませてやってくれ。処置は十五分後だ」

指示を受けた二人は再び外に出た。

食事を始めた人々に背を向けて処置にかかる。井上が手にするライトの灯りを頼りに極細のカテーテルを鼻から挿入して行く。井上が顔を背けたように灯りがずれた。「ちゃんと照らせ」「はいっ」短い遣り取りの後、印が書かれた範囲で挿管を止めてサージカルテープで固定する。薬瓶に差し込んだ注射器をチューブに繋ぐと固唾を呑んで見守る榊と井上の前で雄一郎は一気にプランジャーロッドを押し込んだ。

「ぐっ」男が呻いた。顔は苦痛に歪んでいる。素早く、しかし慎重にカテーテルを抜く。どこかの粘膜を傷つけたように微量の血液が流れていた。苦悶の表情は消えない。失敗か？　息の詰まる時間が流れる。

苦悶に歪んだ男の顔が緩み血の気を取り戻してゆく。雄一郎は男の胸に耳を当てた。

「心音は正常だ。呼吸も安定している、成功だ」

いつの間にか雄一郎の後ろに立っていた亜希子が小さく手を叩いた。顔を覆った布は外されていた。振り向いて見る亜希子の笑顔は眩しかった。全てが変わってしまったこの世の中で、唯一変わらな
いものがあるなら、それは亜希子の笑顔ではないかと思えるほど雄一郎の魂に安らぎを与えた。傍らに転がる薬瓶には？トコログリア
——非常用？と書かれていた。

「行ってきます」

「ああ、進路はホログラムマップの軌跡をたどるんだぞ。クレバスや氷河の危険がある。近道をしようとしなくて確実に、だが出来るだけ早く戻ってきてくれ」

「わかりました。ハーツ！」

井上の号令で犬達は走り出す。姿が見えなくなるまで見送って雄一郎は屋内に戻る。榊が移動についての説明をしているところだった。

「ええ、電気も食料も充分にあり、お医者さんも居られます。9・02以前とまでは行きませんがプライバシーも確保出来ます」

「我々は、何もお礼をするものを持ってはいないんだが」

怪我をしていたうちのひとり、初老の男性が口を開く。

「話すのが遅れましたがこれは東北のカリスマの指示です。この国を再興させるのはお金でもなければ物資でもありません。ひとりひとりが困難を乗り越えようとする意気込みなんです。ここまで生き延びた皆さんなら、きっとその力になっていただけると信じています。今からでも遅くはありません。医療でも建築でもなんでもいい、自分が出来るようなことを見つけて学んで下さい。あなた方が再建の礎になるんです」

人々の眼は扉の脇に立って弁舌を奮う雄一郎に向けられた。戸惑

いがちだったそれぞれの顔に雄一郎が待ち望んだものがあらわれていた。

「一介のサラリーマンだった僕に何が出来るかばかりませんが、あの時死んでいても不思議はなかったんだ。やりましよう、死んだ気になれば僕にだってきつと何か人の役に立つことが――」

右腕を三角巾で釣った若い男性が立ち上がる。続いて中年の女性が立ち上がって言った。

「途中でやめちゃったけど私は看護師の学校に通っていたことがあります。教えてもらえるなら――いいえ、学びます。傍で見て肌で感じて覚えます」

「うちは美容師やってん。髪を切るぐらいしかできひんけど、それでも人の役に立つって言えるのかな？」

「勿論です」

思ったより生存者が少なくても、予定数のドームが建てられなくても人々が希望を失わない限り未来は続いて行く。伊都淵の言葉が実感として雄一郎の内に響いてきた。

Obligation

「待ってくれ、俺は行かねえからな」

意識を取り戻した男は中ノ原ドームへの搬送を拒否した。

「どうしてですか？ あなたが気を失っている間の話で聞いていらっしやらないかも知れませんが、あちらにはお医者さんが居て医療の設備も整っています。その怪我も治療してもらえるんですよ」

説得にかかる雄一郎に、ヤスミと名乗る男は言った。

「全部じゃねえが、そのデカイあんちゃんの話は聞いていた。そんな善意の見本みたいな連中のなかに俺みたいなのを放り込んで心配にならねえのか？」

現役時代、意識して距離をおいてきた種類の人間——ヤスミがヤクザ——だったことは雄一郎にもわかっていた。

「俺が意識をなくしていたのは怪我のせいじゃねえんだよ。それは置いて今時……世の中がこうなっちまう前でも一宿一飯の恩義なんて言葉は忘れられちゃったが、命を救われた礼はしなきゃ気が済まねえんだ。誰が何と言おうとついてゆくからな。それに見たところ、お前等に汚れ仕事は出来ねえ。俺にはそれが出来る」

威嚇も恫喝も混じえず語るヤスミだったが、その眼には鬼気迫るものがある。その正体がわかった気がして雄一郎はヤスミの提案を受け入れた。

「わかりました。力を貸して下さい」

「ありがとよ」

「頼んだぞ」

「おう、任せろ。中ノ原では原田さんがもっと多くの人を運べるクローラを作っている。雄のパーティのが行く先々で必ずドーム建造が出来るとは限らないだろうと考えてな。あそこなら設備も揃っている。日本各地が無理なら、中ノ原に山ほどドームを作ればいいさ」

誠が告げたのは状況がはかばかしくない生存者探しを憂慮した伊都淵の発案だった。

「ああ、その時は頼む」

発進するクローラの荷台で何度も振り返る亜希子の姿があった。ブルカを取り去った彼女の唇は「待ってますから」そう告げているように雄一郎には感じられた。

「出発します」

忌々しげに茶色い塊――積み重なったホモローチの死骸――を見るヤスミの背中に声をかけた。

「……この化物どもに俺の舎弟はことごとく喰われちゃったんだ」
そう言ってヤスミはホモローチの割れた頭部を踏みつけた。グシユツと音がして凍りついた頭蓋が潰される。

「お前はボクサーだったそうだな。鈴木雄一郎か……訊いたことがある。本家のオヤジにも堅気の友人にそんなのが居たそうだ」

「そうですか」

ヤクザの世界で言うところの？オヤジ？が肉親ではないことは雄一郎にもわかる。

「これはそのオヤジにもらった物だ。行こう、他人様に散々迷惑をかけてきた俺に何か罪滅ぼしが出来るとしたら今しかねえんだ。なにも天国に行けるなんて思っちゃいねえ。これは俺のケジメだよ」

日本刀を雄一郎の目の前に差し出すと、ヤスミは急に咳き込んで血の混じった痰を吐いた。「今しかない」それは雄一郎のパーティの残された時間を言った訳ではなかった。

出発してしばらくすると井上が雄一郎に近づいてきて言った。

「大丈夫なんですか？ あいつヤクザなんでしょう」

「ああ、そうみたいだな。でも楽をしようとするならドームに行ったんじゃないかな。あの人にはあの人なりの考えがあるようだ。心配することはないさ」

「鈴木さんがそう言われるなら」

納得した訳でもないが、異を唱えるでもない。井上は離れて行っ

た。

「どうやら俺はあまり好かれちゃいねえみたいだな」

櫓に並びかけた雄一郎に今度はヤスミが言った。井上の様に声を潜めることもなく。

「聞こえていたんですか？ 申し訳ありません、悪気はないんです。ただ、あなた方との接点がなかった我々ですから少し戸惑っています」

「いや、聞こえちゃいねえよ。だが俺達みたいのが居て誰かが声を潜めて話す時、それが褒め言葉であるはずはねえからな。普通に暮らしてられるなら俺達との接点なんぞないに越したことはねえやな。至極正常な反応ってヤツさ。何も謝るこたあねえさ」

現役時代、人々に注目されるお前はヤクザに近づかない方がいい、とカジに言われていた雄一郎だったが、彼等が東日本大震災後の東北にボランティアに行っていた際、ヤクザと呼ばれる連中と関わりがあったことは聞かされていた。『ヤクザにもいい人が居る、なんて甘っちょろいことは言わねえが、善人面して悪いことをする連中より彼等の方が正直だぞ』丈の父親は雄一郎にそう言っていた。ヤスミを信じてみようと思ったのは二人の恩人の言葉があったからかも知れない。

「しかしまあ、ひでえ有様だなこりゃあ。地軸がずれて南極に引越しか、いきなりここに連れてこられたらそんな与太も信じちまうかも知れねえな」

櫓がムツとした顔になる。

「与太とはなんですかつ！ 東北のカリスマがそう言っているんですよ」

「おお、怖っ。お前等洗脳されちゃってるんじゃないの？ 俺達と一緒にだな。親が黒と言えば白いもんでも黒いつてな」

ヤスミの乗る櫓に手を掛けようとした櫓との間に雄一郎が割って入る。

「我々は何も強要されていません。聞けば伊都淵さんは答えてくれ

ますが、地軸のズレも座標が変わったことも好きに判断しろと言われている。『俺が間違っているなら結構なことだ。だが現実は受け入れろ。一面氷の世界で生き抜いてゆくためにはそれが一番大切なことだ』あの人はそう言いました。ですから、我々も聞かれない限り状況を伝えることはしていません」

「なるほどね、これが収まった時、どこかの偉い学者に間違っていると言われてもいい様、逃げ道は用意してあるって訳だ」

「あんた、誰のお陰で――」

今度は井上がヤスミに詰め寄る。しかし雄一郎は表情も変えず――勿論フェイスマスクの下のだが――言った。

「ええ、伊都淵さんの切なる願いは？自分の判断が間違っていた？なんです。だから、その時は大喜びされると思いますよ」

「ちえっ！ 張合いのねえ野郎だな、お前もその伊都淵ってヤツも止めた、止めたっ。こんな奴等相手にしてちゃ俺が悪者になっちゃうばかりだ」

「ヤクザだったんでしょ？ 充分悪者じゃないですか」

榊の突っ込みに少し鼻白むような顔をしてヤスミは答えた。

「違いねえ」

そして四人は声を上げて笑った。雄一郎にはわかったことがある。ヤスミのべらんめい口調が丈の父親を彷彿とさせていたのだ。生きていればカジと同じく六十を過ぎていたはずだが、農園で最初に出逢った時の丈の父親、小野木淳一の面影をヤスミに重ねていたのだった。

Golden eagle

ドームの建造は言うまでもなく肉体労働だ。住人の殆どが出来る範囲で全力を尽くしている。？全員？と言えない理由は後に語られる。

夕食が終われば、それぞれが部屋に戻って眠るだけ。疲れを癒すべく深い深い眠りに身を委ねている――はずだった。真柴さんに割り当てられたのは入り口近くの、簡易ベッドを三つ並べれば夜中に用足しに行くにも体を振らねばならない狭さの部屋だった。尤も、それは僕達だけではなく、地下シェルター全員に課せられた苦行でもある。ただ特に膀胱器官に問題がなければ、くたくたの体を尿意のためだけに起こす者など誰ひとりとしていなかった。

そして三時間の眠りで事足りてしまう僕は暗いうちに目が覚めてしまい、隣で眠る原田兄弟に気づかれぬ様、脳裏に真由美さんを思い描いてこっそりとマスターベーションをする、そんな習慣になっていた。P300Aの効果は絶大で、出発前夜の記憶がありありと浮かび上がる。真由美さんの裸身がそこにあるかの様なイメージは、例えばマスターベーションでさえ僕に充分な興奮と満足感を運んでくれている。(出来ればこれは内緒にして欲しい)

その充足感覚えやらぬ中、小さな電位変化を僕は感じた。トコログリア未接種のお年寄りのため暖房を停止することのないシェルター内部ではあったが、LPG発電機の音が変わったのだ。この一週間程の間に二度ほど気づいた変化だった。クローラ製作のために真柴さんが起きているのではないかと訊ねてみたことがあるが、彼の返事は「それも進めなければいけないが疲れていてそれどころではない」だった。突き止めてみるか、僕は赤いショートコートを羽織ると原田兄弟を起こさない様、細心の注意を払って部屋を抜け出した。

先ずは機関室に行つてレベルを見る。コンマ数キロワットではあ

ったが暖房だけに必要な電力の値を超えている。僕は自分たちの部屋を除く全てのドアの前に立って耳を済ませてみた。会議室の斜向かい、ドーム建造に積極的でなかった、いや、「参加させて下さい」とまで言いながら不承不承、楽な役割を選んでいたドーム反対派の若い男中島としば髭遠藤の部屋の前で足を止める。電位の変化はR103とドアにプレートが下がるその部屋にあった。小さな電子音と話し声が聞こえる。踏み込んでみるか、だが僕はこのコミュニケーションの住人ではない。その考えを思いとどまり真柴さんの部屋をノックした。

「小野木君か、寝過ごしたかと思ったよ」

寝惚け眼の真柴さんだったが、僕の物言いたげな目を見てすぐに自分が何を要求されているのかに気づく。彼を伴って戻ったR103からは依然として同じ音と電位の変化がある。

「中島、遠藤、起きているのか？」

真柴さんがドアを叩いた。彼の耳には聞こえなかったろうが「やっべえ隠せ」と言う声と長く細い電子音が僕の耳に届く。

「何ですか、こんな時間に」

わざとらしく目をこすりながら中島がドアを開く。遠藤は狸寝入りを決め込んでいた。

「そっちのマットレスの下です」

バックアップ程度の微電流でも僕には所在がわかる。何せ脳波を読めるくらいなのだから。僕が指差す先を辿った中島の目に狼狽が走った。立ち塞がろうとする中島を押し退け、真柴さんは電源の落ちたゲーム機端末を引っ張り出した。

「こんなものに貴重な電力を……」

狸寝入りを止めた遠藤と中島は罰が悪そうに互いの足元に視線を落としている。他の部屋の住人が起きてくる気配があった。

午前四時、コミュニティの緊急会議は招集されていた。

「眠れなくて、つい……」

「女性でさえ力仕事をしているんです。眠れないのは腰が痛いのが悪いのと楽な作業ばかり選んでいたからでしょう！ あなた方の行為は許されることではありません」

割れ眼鏡の池田さんの非難は正しい。僕は被告席の二人の脳波を読む。「誰がチクったんだ」「仮病がバレてたのか？」そのままを読み上げた。ポカンと口を開いたまま僕を見ていた二人が慌てて否定の言葉を口にする。

「そんなことしてませんっ！ 新入りの言葉と我々のどちらを信用するんですか？ 真柴さん、斎藤さんっ」

斎藤さんは「まあまあ」といった様子で掌を下に向け二人を落着かせ、真柴さんは考える表情になっていた。そして「小野木君、ちよっと」と言って僕を会議室の外に連れ出す。

「信じ難い話だが、君は人の考えていることがわかるようだな」

「ええ、ただ東北のカリスマから、良い人間の意識を読むことと操作は禁じられています。今のはやむを得ずです」

「操作までもか——恐ろしい男だな君は。考えがある。協力してくれないか」

「僕に出来ることでしたら」

真柴さんの耳打ちに僕は頷いた。

「君達二人にはペナルティとして今後一週間水の運搬をしてもらおう。但し、これはあくまでも提案だ。君達が自分自身で何か罰を考えてくれてもいい。そして採決は会議参加者全員の了承をもって決定とする」

会議室に戻った真柴さんがそう言うのと被告二人以外の全員から拍手が沸き起こった。切断前の水の運搬は人間重機である僕が受け持っていたが別に苦痛でも何でもない。何より僕には走り回ることによって充電が必要だった。ブロック状態になった水を積み上げるのも僕がやってもよかったのだが「彼等自身の手で作り上げたという意識が大切なんだ」といった伊都淵さんの指示に従い必要以上の助力は控えていた。

「足が治れば」「腰の痛みが引いたら今までの分まで頑張ります」
中島・遠藤の二人が同時に声を上げる。

「冗談じゃねえぞ、使い減りしない馬鹿力がそこに居るのに何で俺たちが」

僕は再び、二人の思考を読み上げた。これが真柴さんの依頼だった。

「放逐だっ！」

しばらく間があって声が上がる。普段は物静かな池田さんだったが、今はかなりの興奮状態にある。そしてそれはあっという間に参加者全員に伝播して行った。つまらない駆け引きのせいで絶体絶命の窮地に追い込まれてしまった被告席の二人は顔面蒼白になって打ち震えていた。

「放逐だ」「今すぐ出て行けっ」の声が乱舞する中、真柴さんが「待ってくれ」と言って手を上げた。

「よく聞いて欲しい。ドーム建造は小野木君達が来てくれたからこそ可能になったんだ。彼等が居なければ我々は未だにシエルターでひっそりと食料と電力を節約しながら暮らしていたはずだ。微かながらも明日を信じられるようになった我々にも中島・遠藤の二人のような気の弛みがあったとは思えないだろうか。彼等は魔が差しただけでも知れない。こんな世の中で大切なのは全員が信頼し協力し合うことだ。人が人を裁くようなことがあってはならない。彼等に信頼を取り戻すチャンスを与えてやってはもらえないだろうか」

人は易きに流れるものだ。いつでも逃れられると思っっているうちに魂は墮落という陥穽にすっぽりと囚われてしまう。イーグルスもそう歌っていた。だが、それでは明日を手繰り寄せることなど出来ない。真柴さんはそれを二人に、そしてここに居る全員に伝えたかったのだと僕は思った。一瞬にして会議室を静まり返らせた真柴さんを僕は畏敬の念をもって見つめていた。彼こそが僕の手にした能力を受け取るべき人物だったのだろう。被告席の二人は俯いた顔から机に幾粒もの涙をこぼしていた。彼等の思考に？反省？のふた文

字がある。僕を見る真柴さんにゆっくり大きく頷いた。

「許してやってはもらえないだろうか。今後こそ彼等も反省していると思う。この世界での放逐は死を意味する。折角生き延びた二人なんだ、彼等にも東北のカリスマが提唱する日本再生の原動力になつてもらおうじゃないか」

パラパラと巻き起こった小さな拍手は大きな賛同の声へと変わっていった。雨降って地固まる。最初からこの辺りを落としどころとして会議を招集したのではないかとまで思えるほど、真柴さんの手際は鮮やかさだった。

ドームの基礎は出来上がった。培養なったバイオ流体かんしょ……長いので？赤いやつ？と言い換えよう。それを注入すれば次の段階——壁面の積み上げ——に進める。既に相当数のブロックは用意されており、作業に当たる人々の目にも完成したドームのシルエツトが想像されていたことだろう。例の二人も積極的に作業に参加しており、骨身を惜しむことなく働く姿は胸を打つものがあつた。

「ああゆうリーダーが沢山生き残ってくれるといいな。俺、感動しちゃったよ」

パワーバーと水だけのランチを取る僕と原田兄弟は、次なる目標に意識を向けていた。

「真柴さんのことかい？ そうだな、僕もそう願うよ」

「俺のボードを直してくれたおねえさんが居たじゃん、あの人も真柴って言うんだって」

瞳の大きな女性のことだ。彼女が何かの学位を持っているといった話は男性の真柴さんから聞いていた。夫婦だったのか兄弟だったのか、いずれにせよ優れた人の許には優れた人が集い、そうでない人の所へはそうでない人間しか寄つて来ない。僕は自分がもっと成長すべきであることを彼等を見ていて学んだ。

風が動いた。風真が手に持っていたパワーバーが一瞬にして消え去る。視覚を解放すると15 m程の高み、氷塊のてっぺんに大きな

猛禽類が優雅に舞い降りて行くのが見えた。鷹だろうか？ 羽根を広げたそれは2mにも及ぼうかと言う大きさだ。サイズと色から僕はイヌワシだと推測した。

「あーっ、俺のメシが」

恨めしそうに左右に目をやる風真だったが、何が起きたのかまでは理解出来ない。それほど風の動きは早かった。

「猛禽類も生き残っていたようだな」

僕が指差す先、イヌワシの姿を見つけた原田兄弟があんぐりと口を開けて見上げる。

「でっけえ、あれ鳥か？」

空中を生活の場とするもののなかでは生態系の頂点に位置するのが猛禽類だからな。空のプレデターだよ。野うさぎぐらい楽々と掴み上げて飛ぶそうだな」

「へえー、かっこいいなあ」

今しがたランチをさらわれたことも忘れ、風真はイヌワシを賞賛していた。空の王者か——僕は閃いた。彼だか彼女だかの力を借りることが出来れば搜索はぐっと効率の良いものになる。原田さんお手製のボタンスモークを手に僕はイヌワシの居る氷塊に近づいて行く。意思疎通が可能な周波数域を探りながら。

《肉食だったよな、君らは。どうだこれ、美味いぞ》

カクカクと首を振るばかりで反応はない。一瞬羽ばたきかけたのを見て僕は足を止めた。哺乳類ならまだしも相手は鳥だ。シンプルに行こう。僕はアプローチを変えてみる。

《食べ物保証、条件あり》

何やら火やロイ労働者の募集広告みたいになってしまったが、イヌワシが首を止めた。眼球を動かせない彼等の視界の正面に入ったのだろう。僕は意思疎通の試みを続けた。

《褒美、仕事》

ほぼ鷹匠の気分であった。ジェダイの騎士が持つミディークロリアンは架空の物質でもソマチッドの存在は確認されている。その微

小生命体がどうDNAに働きかけたかによって種目は分かれてしまったが地球に暮らす生命体はその起源を同一にしている。方法さえ見つけることが出来れば意思疎通は可能だとの自信があった。

《ヤツテモイイ》

通じたっ！ 巷ではカラスの方が知能が上だの言うが、今やその巷もない。何よりカラスさえ襲って食べてしまうのがイヌワシだ。映画アバターに出てきたなんとかってゆう赤いヤツみたいなもんじゃないか。バイオ流体緩衝材と混同しそうだが、このイヌワシは黄金色に輝いていたので問題ない。彼女（それは後に知るのだが）は氷塊から僕の肩に舞い降りてきた。

「すっげー、飼い慣らしちゃったんか？」

海地があからさまに驚く。実はイヌワシに掴まれた肩が痛くて堪らなかったのだが、僕は強がってみせる。

「人間、誠意をもって語り合えばわかるもんなのさ」

「鳥じゃん、それ」

風真の突っ込みは正しい。そしてイヌワシの悲しい物語を僕は聞かされる。

《ワタシノ……》

カタカナでは読みにくいだろうから僕が翻訳しよう。我らがゴールデンイーグルは絶滅危惧種である。（今や我々人類もそうなっているが）彼女にその意識があったかどうかはともかく、夏の日本に居たはずがあつという間に真冬以下の状況となり多くは南へ飛んでいつてしまったらしい。『どこへ行っても今の地球は同じだよ』という意見を差し挟むことなく僕は彼女の語るに任せる。何でいつもこうなるんだ……

母性本能に富む彼女は（どうしてこんなばかりと道連れになるのかはわからないが）巣のヒナと卵のために残ったのだが、衝撃波になぎ倒された木の上に作られた巣は行方不明のままだという。捕食者である彼女が餌のなくなったこの日本で生き延びられたのはホモローチの死骸があったからだそうだが（ここで僕はおえっとなっ

た）それも時間経過とともに氷漬けになってしまっていた。そこで風真が手にしていたパワーバーを失敬したのだそうだ。悪いことは知りながら（これは僕の想像である）。

ともあれ、彼女が仲間に加われれば搜索が捗ることは間違いない。《ナンカクサイ》と言いながらも彼女はボタンスモークをたいらげた。条件である餌はどうするのかって？ 大丈夫、彼女達は腐肉でも気にしない。だいたいにおいて鳥類は年がら年中下痢しているみたいなものではないか。氷漬けになったホモローチを切り裂くのは気が進まないが犬猫の死体なら氷を掘り返せば幾らでも見つけれたし、次の目的地にも餌の当てはあった。

しかし、その前に……本物の鷹匠が腕に巻いている物を探す必要がある。それほどまでに彼女の爪は鋭く僕の肩に食い込んでいた。

ボタン

「どうやら私の見込みが甘かったようです。この分では生存者は人口の1パーセントを切ってしまいそうです。ホモローチの襲撃を計算に入れていなかった」

三つの捜索隊から報告を受けた東北のカリスマこと伊都淵貴之は、そう言って肩を落とした。

完成した氷のドームではなく、丈が地下要塞のようだと評した地下シェルターの会議室。机を挟んで向き合っているのは伊都淵が師を仰ぐカジだった。

「例え、そうだとしても君のせいではない。災害の備えをしなかったのは君の警告に耳を貸さなかった政府であり個々の責任だ。我々は彼等の保護者ではないのだから。この杜都市に三つ、農園跡に建造中のものを含めふたつ、同じく建造中のものがタケ坊が見つけたコミニティにひとつと正と村山君が向かった十州道にひとつ。雄一郎が見つけた生存者は中ノ原に回収済み。確かに厳しい状況ではあるが、9・01からまだ二ヶ月と少ししか経っていないんだ。これなら上首尾とも言えるのではないだろうか」

「そうでしょうか……」

意識操作をしてももっと多くの地下シェルターをつくらせるべきではなかったのか。人々の意思を尊重したつもりだったが、それは自身の怠慢ではなかったのだろうか。あれだけ大量に出荷したバイオ流体緩衝材はどこに消えたのか、自問に耽る伊都淵にはカジの言葉も届かない。二人の居た会議室のドアがノックされ、返事も待たずに入ってきたのは依子だった。言葉を用いることなく意思を交わし合う伊都淵と依子の通信メカニズムがどうなっているのか、能力を持たないカジにはわからない。だが以前なら近くに居ることで成立していたものが離れた場所でも感じ取れるほどに進化していることは間違いない。今も伊都淵のSOSを感じ取ったのだろう。臨

月を迎えて尚忙しく動き回っていた依子が『東北のカリスマの背中を張り倒す人間は自分以外には居ない』と重いお腹を抱えて地下への階段を下りてきてくれたのだ。

「また、パパが泣き言を言ってるみたいですねー」

依子は自分のお腹を話しかけながら「よいしょっと」とカジの隣、伊都淵の斜め向いに腰を下ろす。伊都淵は俯いたままふっと唇を緩めた。

「こう考えればいいじゃない、人々は全て自分で未来を選択をしたの。タツキーのせいじゃない」

「懐かしいな、その呼び名も」

伊都淵は薄く笑って顔を上げる。

「みんなに状況を受け入れろって話していたのはあなたでしょう？
だったらあなたもそうないな。その上で最善の策を講じる。それがあなたの役目でしょう？」

「最善はいつも考えているさ。その結果がこうなんだ。俺はほとんど自分の浅はかさに呆れているところだ。ここいらが作られた秀才の限界なのかも知れないな。人間性も君より遥かに劣る。代わってもらえるならいつでも席を譲るよ」

「またその話を蒸し返すつもり？ 責任が重いからって投げ出すの？
あたしはこの子の父親がそんな意気地なしであって欲しくないわ」

「投げ出せないから悩んでいるんじゃないか」

「今夜の定時連絡はあたしが代わってあげる。雄一郎君達に東北のカリスマがベソをかいと教えてあげるわ」

「勘弁してくれよ。彼等にあれだけ厳しいことを言った俺なんだぜ？
そんなことが知れたら――」

「だったらしっかりなさいっ」

「……はい」

東北のカリスマも依子にかかつては形無しだった。もう大丈夫だろう。カジは後を任せて席を立つ。

薄暗い階段を上って行く時、カジはプロボクサーだった現役時代を思い出す。そして粗末なパイプ椅子の観客席でハンカチをくしゃくしゃに握り締めて応援をしてくれていた今は亡き妻美穂子を。彼女の在りし日の姿を思い浮かべる毎、離れて暮らしていたばかりに病に気づいてやるのが遅れ、気づいた時には既に手の施しようがないほど美穂子の病巣は広がっていたことが悔やまれてならない。「子供達をお願い」ある怪我のため子供を産むことの出来なかった美穂子が最期に告げたのは彼女が勤めていた施設の子供達のことだった。障害を持つ子の引き取り先は見つかったが、親に捨てられた子供達の行き先が決まらず、自分の子供として育てると言って引き取った三人を丈の父親——小野木夫妻は我が子の様に可愛がってくれたことを何度も思い出していた。

頬を伝う涙に気づき、カジは自分が年老いたことを知った。私は死に場所を探しているのかも知れない。ならば最期の最期まで闘って死んで行こう。屋外への扉を開けたカジの顔に迷いや後悔はなく、自分の拳だけを信じてリングに向かって行った往年の精悍さを取り戻していた。

「動いたぞー」

ドームの中から歓声が上がリ、排気筒から白い煙が立ちのぼっていた。ガスタービン発電機3号機が完成したようだ。

「出力は？」

若い作業員達がドームの外から掛けられたカジの声に振り返る。ススで真っ黒に汚れた顔に白い歯が映える。

「原発並みとは行きませんが、ここのドーム全ての電力を賄えます。風力発電の開発も順調です。発電量に目を瞑ってローター径を落とせば凍結も起きにくくなります。数で勝負ですよ」

「そうか、よく頑張ってくれたな」

カジから労いの言葉を受けた作業員は真っ黒になった顔をくしゃくしゃにして笑っていた。

丈の父親を影に日向に支え続け、伊都淵に能力の使い途を提案したのは誰であろうこのカジだ。彼なくして今日の杜都市はなく、丈の誕生も伊都淵の真の覚醒も起こり得なかったに違いない。迫りつつある人生の黄昏時に怯えることはなかった。バトンを委ねる相手はそれぞれが立派に成長してくれていた。

反乱

湿った様な咳が続くヤスミだった。ひどく咳き込んだ後は死人の様な顔色になっている。『作用には個体差がある』所教授の言葉を雄一郎は思い出していた。

「ここいらのはずだぜ」

ホログラムマップを掲げて言うヤスミの声は少しかすれていた。

「何がですか？」

「光のなんとかって言う宗教団体の本部があつたはずだ。茶畑の中に突然でっかい建物を作り出したかと思つたら変な洋服を身に纏つた連中が集まり出したのをテレビでやっていたじゃねえか」

あの教団のことか——雄一郎はそのニュースを思い出した。

「へえ、ヤスミさんヤクザなのにニュースなんか見るんだ」

井上が混ぜ返す。見渡す限り氷の世界に四人だけといった状況が彼等の結束を固め、わだかまりを取り払っていた。

「あつたりめえよ、商売敵がとっ捕まったりしてたらいい気味じゃねえか」

「商売敵？ 対立組織とか言わないんですか？」

「隠語だよ、隠語。スラングってヤツさ」

「あらら、英語までお使いになるんだ」

榊も加わって会話に弾みがつく。

「こう見えても俺は大卒だぜ。御神体だか何だか知らねえが、でっかい金色の球体が飾ってあつただろう？ 俺達は●ンタマ教団って

呼んでいたもんさ」

井上と榊が大声で笑い、その声が氷原に木霊する。

「下品な大卒だなあ」

「違いねえ。だがあの教祖、白川とか言つたっけ？ あいつの素行の方がよっぽど下品だぜ。信者からは御布施の名目で財産を——それこそケツの毛まで筆り取っていたそうだし、女の信者は全て自分

のお手つきにしちまったそうだからな。俺達でもさすがにあそこまではしねえやな」

週刊誌にそんな記事が載っていたことも雄一郎は覚えていた。

「地下工場じゃあ銃器や怪しげな薬品も作っていたって聞いたぜ。そんな連中でも助けてやるつもりなのか？」

「勿論です」

間髪いれずに雄一郎は答える。ヤスミは考える表情になった。陽が翳り風が吹き始めていた。この三日間生存者は見つからず、櫓のシートをヤスミに譲った榊と井上は毎日フルマラソンをしているようなものだった。生存者が見つければ少しは彼等を休ませることが出来る。雄一郎の願いは切迫したものとなっていた。

そうこうしているうちに崩れ落ちた門柱の様なものがパーティーの目に入ってきた。ニュースでは目にしていたが間近で見る広大な敷地面積に目を奪われる。小さな山脈を思わせる氷塊は建造物にしっかりと基礎工事が行われた証なのだろう。多くの建物が跡形もなく吹き飛ばされていたこの世界で、幾らかでも残骸が残っているのは頑丈な建物であったからに他ならない。だがそれが別の感慨を与えることもある。

「ひどい……な」

建物のあった状況とそこで生活していた人々の様子が想像されてしまうのだ。残骸を眺めた井上が呻くように言った。引きちぎれ捻じれたまま凍りついた門扉は洒落た装飾が施されており、形を成していた頃は洒落た結婚式場にも見えていたのかも知れない。3m近い高さは外部からの侵入者を防ぐ目的だったのだろう。しかし敷地を囲う石壁ごと吹き飛ばされた揃い柄のフェンスも既に用を成さなくなっていた。パーティーはすんなりと敷地内に入ることが出来た。

雄一郎には宗教に救いを求める人間が理解出来なかった。？怖い程当たる教祖の予言？そんな評判のこの宗教団体が下部組織に優秀な興信所を持っており、信者以外からも多額の金を騙し取っていたことを9・01の前に伊都淵から聞かされていた。教祖や教義を盲

信した人々もあの衝撃波で目が覚めたに違いない。尤も覚めた途端、また目を閉じることになっていたのだろうか。

「信者の血肉で出来たご立派な神殿も呆気なく吹き飛ばされちゃったって訳か、偽りの神が本物の逆鱗に触れたのかも知れねえな。気は変わらねえのか？」

「変わらないとは？」

雄一郎がヤスミに聞き返す。

「この連中の悪行は聞いているんだろう？ それでも助けてやるってえのか？」

「その返事は既になっています。我々の助けが必要とされるなら、生存者が誰であろうと手を差し伸べるべきです」

雄一郎は榊と井上に顔を振った。

「地下への通路を探そう。生存者が居るかも知れない」

多くは期待出来まい、そう思いながらも搜索の手を緩めることのない雄一郎だった。折りからの吹雪が氷の裂け目から上がる煙をパーティーの視界からカムフラージュしていた。それに気づいていたのはひとりだけ、そのヤスミが櫓から飛び降りて言った。

「奇特なこったな。俺は抜けるぜ」

啞然として見つめる雄一郎達に薄ら笑いのヤスミが続ける。

「俺はカリスマに感銘を受けた訳でもなんでもねえ。命を救ってもらった義理は果たすつもりだったが気が変わっちゃまったんだ。悪く思うなよ」

「なんだよ、それ」

憤然として井上が詰め寄ろうとするとヤスミは日本刀を抜いた。

雄一郎が左手を背中に回す。

「おっと、動くなよ。背中に何か隠し持っているのは知ってたんだ。だがそいつで俺を仕留める前に、このあんちゃんは今ます切りになってるぜ」

「所詮、ヤクザはヤクザか。とんだ汚れ仕事だな」

鼻面に日本刀の切っ先を突きつけられてない榊は威勢がいい。

「そうゆうこった。ここいらに兄弟分の組があったから様子を見るつもりだったんだよ。だがな、徒歩で150kmも移動するのはかったるくていけねえ。楽ちんだったぜ犬櫓は。心配するな、俺はそのなんとかグリアも食料も奪いやしねえ。追い剥ぎよりかはマシだろう？　じゃあな」

駆け出したヤスミの後ろ姿はあっという間に吹雪に紛れて見えなくなった。

「あれが鈴木さんの言ったヤスミの考えってヤツですか」

「言葉がすぎるぞっ！」

井上の言葉を櫓が嗜める。

「すまん、俺が間違っていたようだ」

「いえ、申し訳ありませんでした。つい……」

頭を下げる井上に雄一郎は軽く手を上げて気にするな、の意をあらわす。あの目にあった決意は本物だったはずだ。それが何故急に……雄一郎にはそれが気になっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0921y/>

エウロパの旅人―日本再生篇

2011年11月21日16時45分発行